
悲しみの血 呪われた涙

挟間 猩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しみの血 呪われた涙

【Nコード】

N0593E

【作者名】

挟間 猩

【あらすじ】

親に呪われた少女トリスティン。彼女は呪いのせいで他人に蔑こけまれ他人を信じられなくなってしまう。人と接することが嫌になり森へ移り住むが、その平穏も長くは続かなかった。そして彼女は平穏を奪い、人生を踏みにじった者たちへ復讐を開始する。争う世界全てを敵に回した少女はどんな結末を望むのか。少女が描くすこしツンデレな恋愛あり、悲しい戦いありのファンタジー作品を目指します。内容はダークですが、話の中にギャグもあります。この作品はxai先生の『C's』とリンクしていますので、そちらと合わせ

てお読みいただければ一層楽しんでいただけたと思います。只今作者が多忙のため執筆が遅くなっております。

プロローグ・1（前書き）

文章が読みにくいかもしれませんが、見てくれればうれしく思います。

プロローグ - 1

あれは、15歳の誕生日の事。

私は両親に連れられて地下室に入った。家の地下室へ入ったのは初めてのことで、わくわくしたのを覚えている。それまでは危ないからと入れてもらえなかったからだ。

プレゼントを地下に用意してあるといわれた私は何をもらえるのか考えた。態々（わざわざ）地下に用意するほどのものなのだから凄いものに違いない、しかも今まで入れなかった場所にあるということが私の期待を大きくさせた。

「さあ、こつちだよ」

階段を下りた所にある扉を開けようとする父様が私を見て苦笑しているのは、私が期待と喜びで顔を赤くしているからだろ。自分でも顔が熱くなってるのがわかる。

母様が優しくそんな笑顔で父様にそつと触れると、父様は母様に頷いてからゆつくりと扉を開ける。解き放たれた部屋からは冷たい空気が流れ出てきたが、私はそんなことを気にも留めずに部屋の中に駆け込んだ。

部屋の中は暗く、何があるのかまったくわからない。困って部屋の中をキョロキョロと見回してしまう。

「焦らなくても大丈夫よ、プレゼントは逃げたりしないわ」

そう言って母様は部屋のランプに灯り^{あか}をつける。焦ってしまった自分が少し恥ずかしく思えた。

灯りに照らされた部屋の中は案外狭く、特に物が置かれている様子も無い。

父様と母様に手を引かれ部屋の中央まで来ると、足元に何か書かれていることに気付いた。それは部屋の隅々まで書かれた模様のようで、とても神秘的だったのを覚えている。

私が模様に気をとられていると、父様たちは部屋の入り口まで戻

っていた。

「父様？ 母様？」

不安に駆られた私は二人の元へ行こうとしたが、足が動かない。

「え……父様？」

足だけではない、動こうとしても体が何も動かなかった。自分の体が自分のものでなくなるような感覚に言いようの無い不安を感じる。いや、不安というよりは恐怖といったほうが正しいだろう。

父様たちはこちらを見たまま笑顔を崩さない、まるでこうなることを望んでいたかのように。

「トリス、15歳の誕生日おめでとう。今年は大きな病気もせず元気でよかった、これが私たちからのプレゼントだ、受け取ってくれ」
お前が生まれたときから準備していたんだよ、そう言いながら父様は手に持った瓶を床に落とす。すると床に描かれた模様が輝くだす。その輝きは瓶が落とされたところから広がり、床以外にも壁や天井にまで広がる。気付かなかったが壁や天井にも薄く模様が書かれていたようだ。

そして部屋全体が光に包まれた瞬間、私の体に衝撃が走る。爪先から髪の毛の先まで、断続的に痛みと熱が体を貫いた。

「ひっ、やだ……いたい……いやああああ！」

涙があふれ、口の端から涎がつたい落ちる。

ぼやけた意識の中、視界の端に父様たちの姿が映った。

「と……さま、かあ……さま、たす……け」

口も痺れてきてうまく喋れない、意識が朦朧もうろうとする中で必死に助けを呼んだ。しかし父様は母様の肩に腕を回し、こちらを眺めているだけで助けてくれない。頭の中が真っ白になり体が崩れ落ちる瞬間、最後に見たのは満足そうに頷きあう両親の姿だった。

翌日の朝、私は冷たい石畳の上で目が覚めた。

部屋の中は灯りが消えて暗くなってよく見えなかったが、昨日の

ことを思い出し床にある模様を見ようとした。しかし床に模様は無く、部屋のいたるところを見てもそれは同じであった。

あの後どうなったのかはわからないが、自分の部屋に戻してくれなかったことや体の痛みなど誕生日プレゼントにしてはたちの悪い冗談にしか思えなくて父様たちに昨日の事を聞こうと考えた。

地下室の扉はすんなりと開き、私は家の中を探し回った。しかしどこにも両親の姿は無い、買い物に行っているのかとも思ったが父様の鞆も母様の財布も置いてあったので出かけているにしてもすぐに帰ってくるだろうと思った。

昼ごはんも食わずに帰りを待った、お腹が空いても我慢した。不安で涙が止まらない……夜まで私は泣いていた。

悲しくて……怖くて、ベッドの上でひざを抱えて震えることしかできない。

「誰か……助けて、背中が痛いよ……怖いよ父様、母様……助けて」
私はこの家で一人になってしまったのだろうか、誰も答えてくれる人がいないのはわかっていたが、私は虚空に向かって助けを
父様たちを呼び続けた。

ブローグ・1（後書き）

なるべく早く更新していこうと思いますので、どうか見てやってください。

誤字脱字がありましたら報告お願いします。

プロローグ - 2

ベッドの上で寝付くこともできず、泣きながら横になっていると窓から朝日が差し込んできた。

ああ、私は捨てられたんだ。

自然とその言葉が頭に浮かんだ、枯れかけていた涙がぶわつとあふれ出てくる。

私はこれからどうなってしまうのだろうか。このまま死んでしまふの？ それとも孤児院に入れられてしまふの？

様々な憶測^{おくそく}が頭の中を埋め尽くす。

孤児院は嫌だ、あそこは知らない子が沢山いるし変な人に売られてしまふって噂も聞いた。それに……あそこは汚くてみすばらしい。それならばこのまま死んだほうがましだ。そう思って私は目を閉じる。

諦めてしまつたからなのか、今度は直ぐに眠気がやってきた。このまま寝てしまえば天国にいけるのだろうか、天国という言葉に少しの不安と大きな安らぎを感じ私は意識を闇へと沈めようとした。「トリスちゃん？ トリス……トリスティン！ 確^{しっか}りおし、死んでほだめだよ！」

不意に掛けられた言葉にびっくりして体が震えた、それに伴い意識^{ともな}が強制的に覚醒させられる。

この家には誰もいないはずなのに、そう思って声の元を見ると隣の家に住むおば様が目に涙を浮かべて私を見下ろしていた。

でも何故ここにいるの？ そう問いかけようとしたとき、私は彼女に抱きしめられた。驚いて抵抗しようとしたが体に力が入らずそれはかなわなかった。

後で聞いた話によると父様は何の連絡も為しに仕事を休み、母様

はおば様と前から約束していたお茶会に来なかった。なのに家の中から光が漏れていることに気付き、不安に思っ様子を見に来たのだという。その時に家の中がめちゃくちゃになり 私が父様たちを探すときにやったのだが、私が目を赤く腫らせて寝ていたのを見つけたのだという。そのとき私は「天国に……」とうわごとを言っていたらしく、おば様はとても慌てたのだとか。

それから私はおば様に一部始終を話した。するとおば様は町の人たちに相談し、町の住民総出で父様たちを探してくれた……結果を言えば父様たちは見つからなかったのだが、街の人たちに励まされ私は次第に元気を取り戻していった。

それから数年が経ち、私も独りで生きていけるほどに回復していた。

あれからおば様に助けられて生活していた私だが、家の財産はかなりの額があつたため働かなくても生活できていたのだ。

ただ変わったことが一つだけある。いや、変わらないといったほうが正しいのだろうか。

身長も、見た目も。お医者様は精神的なショックからくるものだから心が癒えれば成長も戻るといつていた。

最初は皆ずつと若くていいじゃないと笑っていたが、さらに数年、十数年と経つても容姿が変わらない私を見る目は明らかに私を気味悪がっていた。

そして一つの噂が立つ。少し離れた所にある町の住民全員が変死した事件が起こったのだが、その犯人が私だというのである。

トリスティアⅡマールは人の精気を奪って若さを保つ魔女である。

確かに私は両親の一見以来異常な量の魔力が体の中に渦巻いているのを感じたが人前でそれを使ったことはなかった。なにより人から精気を奪う魔法なんて使えないのである。

しかし町の人々は噂を信じ始めてしまう。噂を耳にしてから一年も経つと、誰も私と眼を合わせなくなった。

耐えられなかった、私は家や必要なもの以外を全て売り払って街を出た。もうここに居られない、ここに居たら私は邪悪な魔女として処刑されてしまったのだと思う。

門の所で一度町に深々と頭を下げ歩き出した。もうここには戻れない、逃げているだけかもしれないけどかまわなかった。

もう、何かを失うのだけは嫌だったから。

プロローグ - 3

町から町を数年毎に移り住む暮らしにも慣れてきた。

一つの町に長い間住んでいれば住民に容姿のことで怪しまれてしまふし……なにより私が他人と深い付き合いをすることに不安を感じていた、どれだけ優しい人に見えても最後には私を避けていくことを知ってしまったから。

長くて十年、短ければ五年で町から出る。

そしてわかったことが一つある。

私が人ではなくなってしまったという事だ。

もう六十年以上生きているのに容姿は少女のままである、そして体内の魔力が常人のそれとを遥かに凌駕しているのだ。

そして肉体的きにも変化が起きた。

瞳がだんだんと紅くなったのだ。最初は茶色だった瞳がだんだんとオレンジに、数年前には完璧な緋色になった。

もう諦めている、この体は人のものではない。

私は化け物なのだ。

国の南方に位置する町に住んでいる時の事だった。

そろそろこの町から出て次の町へ行こうというときに国が大きな学園を作るといふ話を聞いた。普通の学園ではない、魔法を専門に教えるという今までにないものだった。

もともと魔力を持つものが少ないのでそのような学園を作っても意味がないといわれてきたのだが、今になって何故国が作ったのか疑問に思った。

しかし私自身は力のコントロールができないし、行くところもないので暇つぶしにと学園へ入ることにした。

学園に入るためには難しい学力テストと魔力量検査に合格しなければならなかったが、長年生きている私には簡単なものだった。

そこで私は魔法のいろはを学んだ。基本的なものから禁忌といわれた悪魔召喚まで、身につけられるものは全て。

異常な魔力を持つ私は教員を含め学園の者たちから恐れられていたが、その中で一人だけ積極的に話しかけてくるものがいた。

学園長である彼は国の中に二人しかいない賢者と呼ばれる高位の魔導士であり、唯一私と同等の魔力を持つものだった。

彼は私の魔力を知っても避けずに褒め称えてくれた。その年でそれだけの魔力を持っているなんて凄いと……私の本当の年を知らないくせに。

最初は彼を拒んでいたものの、進級する頃には彼と打ち解けていた。学園では教えてくれない魔術も教えてもらったし、相談にも乗ってもらった。学園で彼の傍だけが心のよりどころだったのだ。

だが幸せは長く続かない。ある日彼の口からこんな言葉がこぼれたのだ。

「君は昔魔女と呼ばれた少女のことを知っているかい？」

背中に冷たい汗が流れた。彼はそのことを話しているとき笑っていたのだが、ずっと私の目を見ていた。

知っていると思った、ここには殺されてしまう。

やはり他人は信じられないのだ。すでに魔法のことは学んだからここに用はない。

私は全てのお金で魔導書と呼ばれる魔法のことが書かれた本を買いあさり、学園に退学届けを出すと学園を飛び出した。

そして国の外れにある森の奥地へ行くと、魔導を用いて塔を建てて住み始めた。ここなら人と触れ合わずに生きていけると考えたからだ。

後にその塔はこう呼ばれることになる。

「悪魔の塔」と。

プロローグ・3（後書き）

読んでくださりありがとうございます、やっとプロローグ終了しました。

次回から本編が始まります。

第1話：眠り妨げしモノ（前書き）

お待たせしました本編です。

第1話：眠り妨げしモノ

目が覚めたら、まずは眠いのを我慢して体を起こす。
そして視線を上げて窓を見る　いや、窓の向こうの夜空を見るのだ。

そこに映る星たちの儚さに人間たちを重ねて一つの言葉を口に出す。

「あの人間共め^{むしけら}」

ああ、これを言わないと一日が始まった気がしないな。
一つ満足げに頷いてベッドを出る。いくら一人で暮らしているとはいえ習慣を壊すのはいけない気がするからだ。

塔の外にある井戸へ顔を洗いに来たのだが、井戸の水が思ったよりも冷たい。もうすぐ冬が来るんだと感じてしまう。

長い間この塔に住んでいるが冷たい水には慣れない。

冬なんて大嫌いだ。暑苦しい夏も嫌いだが……

顔をしかめながらも顔を洗い終えてタオルでふく。いかなん、せっかくの美貌がしかめっ面などしていたら台無しだ。

一人冷たい水に文句を考えていたせいか、気がつけば空高くまで月が昇っていた。

塔の中に戻り、書斎で魔導書を広げる。

夜中は基本的に半ば生きがい^{なか}となっている魔法と悪魔の研究をしている。最初は人間どもに復讐するために魔法のことを調べ始めたのだが、今となってはそれが趣味になってしまったのだ。特に召喚した魔人や魔物を虐める^{いじ}のが楽しくて仕方がない。

その間口にするものと言え^{かめ}ば瓶に汲んである水と森で採ってきた果実くらい、別に一週間くらい食べなくても死なないがおなかは減るのだ。

だが睡眠はしっかり取っている、取っているというか……朝日が昇る頃になると眠くて起きていられない。完全に昼夜逆転している

が、別に他人と接することもないので気にしない。

それに何より静かだったことが大事。煩い街うるさいまちの中に住んでたらキレてしまっただろうし。

魔導書をめくりながらこれからのことを考える。

魔力も今では賢者と呼ばれる奴らにも負けないと思うし、そろそろ復讐を始めてもいい気がする。しかしそうなったら研究を続けることもかなわないだろう。

今は復讐なんてどうでもよくなっているのかもしれない、それよりも研究を進めたいという気が強いと感じる。なによりこの生活をしていれば人間なんて気にしなくてすむし。

……いかな、今日は無駄な事ばかり考えてしまっただけ研究が進まない。

書を開いてから結構な時間がたっていたが大した成果たいが出ない。

こんな日はこれ以上やっても無駄だろう。

机の横に置いておいたリングを齧かじりながら部屋を出る。

階段をトコトコ上がればすぐに私室だ。ベッドしか置いてないけど私にはそれで充分。

まだ日が昇るまで時間はあるが寝てしまおう、一つ手をたたけば服が一瞬でネグリジエに代わる。空間転移を応用した魔法で便利なのだが、消費魔力が多いので普通の人間が使うことはないと思う。

窓のカーテンを閉めて横になる。だんだんと眠くなってきて、完全に寝付く瞬間　轟音が響いた。

驚いて飛び起きてしまった、いったい何事だろうか。カーテンを開けると朝日が顔を見せて世界を照らす中、地上の一部が赤く染まっていた。

あの辺は……たしか町があったはずだ。それなりに大きな町だと思っただ、今では街のいたる所で炎が上がり爆発が起きている。

まったく人間とは争いが好きなものだ。

勝手に殺しあうのはどうでもいいが……私の睡眠を邪魔するのは許せん。少しお仕置きが必要なな。

部屋の壁にかかったマントを身にまとい、私は不機嫌さを隠すことなく荒々しい足取りで塔を出た。

さて、どんな坊やがいるのだろう。そう考えながら、私は町へ向かって飛翔した。

第1話：眠り妨げしモノ（後書き）

感想・評価お待ちしております。誤字脱字等お見かけしましたら、報告いただけるとありがたいです。

第2話：破壊せしモノ

町の上空に着いたが……これはいったいどういう事だ？

塔で炎を確認してからここまで飛んできたのだ、時間にして数分しかたっていないはず。なのに町はもう壊滅状態。

並みの魔法使いならこうはいかない、最低でも魔導士レベルのやつがいる。

だが何故だ、こんな辺境の町に……特に目ぼしい物はない筈だ。

確かに海が山の向こう側にあるからそちら側から攻めるのは簡単だろう、だがそれだけだ。攻め落としてもたいした意味がない。ちよつとは国を攻めやすくなるかも知れんが。

しかし妙だ……塔から炎を見た時も今も、いたるところで何かが爆発しているのに魔力が感じられない。時折町の一角に光線が見えるのだからあの爆発が火薬によるものではないだろう。

こんな技術を私は知らない、私が塔に籠こもっている間に開発されたのだろうか、だとしたら相当厄介だな。

とにかく相手を探さねば、幸いにも爆発が起こっている所へ向かって光線が発されているのが見える。爆発点が複数あるが光線は全て同じ所から発されている。馬鹿め、せっかく魔力を感じられないのにその技術が無駄じゃないか。

発射点まで降下、攻撃に備えて障壁を展開。極力魔力の放出は抑えているがこちらの存在が気付かれていることを想定して動いたほうがいいだろう、負けはしないだろうが同じ勝ちなら一方的な勝利を。

発射点から見て民家の影になる位置に着地する。いまだに攻撃はないが気づいてないのだろうか。

民家の影から頭だけを出して様子を見るのが妥当だろう、そつと……そつとだ。

煙でうまく見えない、しかしあれは何だ？ シルエットが人間じ

やない。魔物か？

煙がはれてきた、だがあんな奴は見たことない。体表は金属的な甲殻に覆われていて、所々が光を反射し輝いているように見える。腕がこつちを向いているがあれは　　つ駄目だ！　腕に光が見えた瞬間、頭で考えるより早く体が動いていた。

魔法を展開して飛び上がる、さっきまでいた所に一筋の閃光が走り爆発。やはり魔力は感じられない、今は流石に危なかった……少し頭に來たぞ。

「おい貴様！　こんな町に何の用だ、誰に召喚されたのか答えろ」
あれだけの力だ、喋る事もできない下級悪魔ではないだろう。

『……召喚？　何のことだ、それよりもお前何者だよ』

頭に響いてくるような声、伝達系魔法の類だろう。聞きにくい。
「聞いているのは私だ、答える愚図」

『偉そうに……オルガに一人で向かって来る馬鹿が』

オルガ、奴の名だろうか……召喚について分からないということは魔物では無いのだろうが人間にも見えない。それよりも私に向って馬鹿だと？この私に向って。

「よくわかった、お前が救いようのない馬鹿だということが。死なない程度に痛めつけて持ち帰り、生かさず殺さず調べまくってやる
う」

『ふんっオルガに敵^{かな}うと思つて……っ！』

右手に魔力を集中させて腕を一振り、低位の魔法だが発動が早い火球を飛ばす。私くらいの実力者ともなればこのレベルの魔法くらい詠唱せずとも発動できる、長々と敵の前で話しているほうが悪いのだ。

あわてた様子で回避する馬鹿。

「避けるな馬鹿、私が無駄に魔力を消費するだろう」

『この小娘がああ、調子に乗るなああ！』

流石に怒ったか、先ほどまでとは違い高速での移動を開始した。
四足を活かした移動法でこちらに近づいてくるが光線を撃つてこな

いのは何故だろうか、何かを狙いがあるのか？

だったらそれを引きずり出せばいい、しかしそれには準備がいる。そのため……まず幻影を作成、3体も出せば十分か。時間を稼ぐためそれら全てに障壁を展開、もちろん私自身にはそれよりも強力なやつを展開する。

幻影を目立つように飛ばして相手の目を引く、その間に私は民家に隠れて準備は終わりだ。

足もとに魔法陣を展開、魔力が漏れるが幻影の障壁からも魔力が漏れているから大丈夫だろう。意識を集中させイメージする、望む相手の姿を、その力を。そしてあとは呼ぶだけ。

「ヴィルト」

その言葉が起因となって魔法が発動する、言葉に乗せた魔力が相手を呼び出す。今となっては禁忌とされる召喚魔法、それは悪魔というものを呼び出すもの、一歩間違えれば自らが悪魔に食われる危険なもの。無論私にとっては簡単すぎるくらいだが。

魔法陣からゆっくりとその姿を現す、毛皮に覆われたその姿は狼に似ているが力は全くと違っていいほど違っている。

「遅いぞ犬」

「なっ久しぶりに召喚したと思ったらいきなりそれか！？」

まったく口だけは立派だな、今度じっくり躑しゅうけねば。

まあいい、今はこいつを使って小生意気こなまいきな奴を捕まえることが優先だろう。

さあ、ゲームの始まりだ。

第2話：破壊せしモノ（後書き）

この更新スピードを保てるよう努力します

第3話：愚かしいモノ

愚痴を言いながらも後を追ってくるヴィルトと共に民家を出る。

どうやら幻影どもはうまくやってくれたらしいな、聞こえてくる爆音から判断すると……そう近い場所にいるわけではなさそうだ。

「それで、いったい何者^{なにもの}とやってんだ？」

「魔物のようできて魔物でない、だが見たこともない化け物。つまり馬鹿だ」

「はあ？ お前の馬鹿は魔人からその辺の虫まで全部を指すじゃねえか、ちゃんと説明しろ！」

ふむ、聞こえてくる爆音から相手が弱くないと考えたのか？ ヴィルトが珍しく焦っている。

そう言っている間にも爆音は轟く。断続的に続くが魔力切れでも起こさないのか？

感じる魔力は2つ、幻影が一つ掻き消されてしまったみたいだな。いくら影でも魔力を与えている以上あの爆発で消されてしまうのか。しかしまだ二つ残っている、奴はそれを追っているのか……それとも影だと気づいてこっちに向かってくるだろうか。

うるさく吠え続けるヴィルトを無視し、民家の前で様子を探っていると音が止んだ。だが幻影は残っている……諦めたのか？

「おい、何だこの音は！？」

音 何も聞こえないがヴィルトには聞こえているのか？ 人には聞こえない類^{たぐい}の物なんだろうか。

「何も聞こえないぞ、どんな音だ？」

「どんなって……こんなでかい音が聞こえないのかお前は、何かを吸い込んでる様な音がするだろう！」

吸い込む音……もしそれがあの爆発に関係するなら、何か危険な攻撃の前兆だろうか。今まで連続して爆発するときにはヴィルトが反応しなかった……つまり次にでかいのが来るのか！？

慌ててヴィルトを蹴り飛ばし自らも飛び上がる。

「げふっ、なにしゃがる！」

7メートルほど蹴り飛ばされたにもかかわらず器用に足から着地し文句を言ってくる、煩いやつだ。

睨みながらこつちへ歩いてこようとヴィルトが足を踏み出した瞬間、今までのものとは比べるまでもない程太い光線が先ほどまで私たちが立っていたところを貫いた。

爆発しないところを見ると今度は貫通性と破壊力を重視したのだろうが、しかしその威力はすさまじい。奴がいる場所から街の外、山の麓^{ふもと}までが何も残らず焼けている。

あんなものまで使えるのか……魔力反応が消えたということは二つの幻影を同時に掻き消し、こちらを狙う事が出来るだけの自信がああ術にはあるのだろう。

「おい犬、あそこにいるのが例の馬鹿だ。できれば生きたまま捕まえたいんだが私では殺してしまいかねんな……お前が捕まえろ」

「……一人でか？」

「一匹でだ」

「少しくらい手伝え！ それにちゃんと報酬を」

「わかつてるわかつてる、いいから手早くやれ」

ヴィルトが言い終わる前に答える、毎回同じことを聞いてくるからな。報酬は牛肉だが。

多少渋りながらもオルガとかいう奴に向って走り出す、獣特有のしなやかな動きであつという間に間合いを詰める。

奴もヴィルトの存在に気づいたのか光線を連射してくるが掠^{かす}りもしない。上体を起こし右腕から光線を打ち続けているせいか移動する様子はないみたいだな。

慌てて四足歩行に戻ろうと腕を地につけるがもう遅い、その瞬間にはヴィルトがその鋭利な爪を振り下そうとしている。体勢を崩しながらもなんとか回避に成功したオルガは距離を取ろうと動き出す。その時にもヴィルトは地を蹴り壁を蹴り、逃げることを許さず襲い

かかる。

『糞犬がああ、煩いんだよ！』

オルガが吠え腕を振るう、今まで光線でしか攻撃していなかったせいかヴィルトは避ける事も出来ずに吹き飛ばされる。今日はよく吹き飛ばされるな。

「はっ、少しはやるじゃねえか」

ヴィルトの顔は笑っている、久しぶりに戦えるのが嬉しいんだろ。体から魔力が溢れ銀色の毛皮が燐光を放つ、少し本気になったという事か。

先ほどとは違い、残像を残して移動するヴィルト。巧みに軌道を変え接近する姿は疾風の如く、振り上げた爪は今度こそオルガの体を捉えた。

鋼同士を叩きつけた様な音が響き、衝撃でオルガが吹き飛んだ。吹き飛ばしたヴィルトは満足げに立っている。

「終わったぞ、早く肉をくれ」

しっぽを振りながら歩いてくるヴィルトに警戒している様子は無い、確実に仕留めたのだらう。

「ここに肉はない、奴を塔に持ち帰ってからだ」

とにかく奴を回収しなければ、拘束と浮遊の魔法をかけようと奴の方を見る。地に横たわっているが何か違和感を覚える、しかしその違和感の正体はすぐにわかった。光っているのだ、奴の左腕が。

まるで空気中の魔力を吸い込むかのように、光の粒子が腕に吸収されていく。

「っ避ける！」

ヴィルトも例の音とやりに気付いたのか慌てて奴の側面に移動する、私もヴィルトの反対側に転移した。自身を転移させるのは例え数メートルでも消費する魔力が多い、町一つを消し去る魔法と同程度かそれ以上だらう。

私たちが避けたすぐ後に、例の太い光線が発射された。その光線はすべてを焼きながら直進し、その先にある塔の上半分を消し去る

と空に消えた。

「と、塔が……」

あの愚図が……よくも私の塔を！

「に、肉が……」

ヴィルトも塔の消失＝肉の消失と考えたのか目に怒りの色が浮かんでいる。

『ひやはははは、避けられたけどあの塔は大事だったみたいだな。ざまーみるー！』

許さん。

「ヴィルト、もういい。消すぞ」

「……ああ」

お互いに奴を許すことはできないようだ、考えることは一つ。

あの愚かものに罰を。

足下に魔法陣を展開、思い浮かべるのは究極の破壊。崩れ落ちる相手の姿。

膨れ上がる魔力を望む姿に変換する。糸のように細いその流れを織り上げ、望む姿を作り出す。

望むは業火、全てを焼くつくす怒りの紅。ほのお

思いを名に込め魔法を開放する。

「煉獄クリムゾン」

「があああ！」

私の呪文と同時に上がる怒りの咆哮。見るとヴィルトの口からも火球が打ち出されていた。

『なっ何だよこれ……』

オルガの馬鹿は私たちから感じた魔力に怯えたのか、それとも魔法に恐怖したのかは知らないがその場から動けずにいる。

結果、奴は悲鳴を上げること許されず二つの炎によって瞬時に塵も残さず焼かれる。

私に害をなすモノは全て消す、例え珍しい研究材料でも 神であつても。

第3話：愚かしいモノ（後書き）

どうもこんにちわ、狭間です。悲しみをよんでいただきありがとうございます。ございます。これから作品をもっとよくするため、よろしければアドバイスをお願いします。更新頑張りますので、これからも悲しみをよろしくお願いします。

第4話：旅立ちしモノ

炎が収まり、奴がいた場所を見るが何も残っていない。少しやりすぎたか。

「ヴィルト、お前のせいで何も残らなかった……褒美は無しだ」

もつとも、食糧庫が位置する塔の上部が先ほどの光線で消えてしまったから肉はない。自分でも「肉が……」とか叫んでたしその辺は分かっているだろう。

「なつ約束が違っじゃないか、肉を貰うまで俺は帰らんぞ！」

「そんなことを言っても肉は無い。どうしても食べたければ森で兎か鹿でも捕まえればいいだろう」

「お前からもらわなければ約束の意味無いだろうが、くれるまでついてくからな」

「ついて来るのは構わんが……馬車馬の如く働かせるから覚悟するんだな」

「……肉追加だ。高級なやつ」

意地でもついて来る気か、まあそのうち食わせてやろう。

だがオルガのことも気になる。私が塔に籠っていた約二百年の間に何があつたのか、あんなものを使役できる技術には興味がある。だがそれをここで調べるのは無理そうだ……なら取るべき手段は一つ。

「塔に戻る」

「あ？ 塔には肉ないんだろ？」

「肉なんてものはどうでもいい、塔から必要な物を持ち出したら旅に出るぞ」

「何でいきなり……なるほど、流石のトリスも二百年間引き籠ってたから寂しくなったのか」

口の端を上げてにやにやと笑ってるのはいいが気持ち悪いぞ。とにかく塔に戻り、これからどうするかを決めなくてはな。

そして来た時と同じく塔まで飛翔して帰ってきた、ヴィルトは森の中を走って来させたが私より早く塔についていた。流石は犬だ。

塔はそこだけ挟られたかのように上部が消えており、無事なのは結界を張ってあった私の私室と地下にある倉庫と書斎だけだった。

とりあえず必要な物を探す。昔気まぐれで作った圧縮魔法を応用したバックを見つけた、これは入れるもの全てを圧縮して保存することが出来る。小屋一個分くらいの量が入られるはずだ。バックに片っ端から物を詰め込む、魔導書や服……ドレスはいらないな。

水は魔法で出せばいいし、食糧は町で買つか森で動物を狩ればいい。そう考えると必要なものは殆どない、結局入れたのはいくつかの魔具と魔導書、それに服だけだ。それに現金はないが大きな町で魔具を売ればそれなりの額は稼げるだろう。

バックを持って塔を出るとヴィルトが木陰で待っていた。持ち歩く荷物がバック一つということに不安がっているのか眉を寄せている。

おっと、大事なことを忘れていた。旅に出るならこんなものいらないな。

想像するイメージは崩壊、細かく砕けて崩れ落ちる姿。

「^{クレ}裂痕」

塔に細かな亀裂が走り、それが全体を覆い尽くすと音を立てて崩れ落ちる。旅に出るなら帰る場所などいらないからな、それに何者かがやってきて私の持ち物を漁られるなんて想像しただけで吐き気がする。

ヴィルトは呆れ顔でため息をつきながらも微動だにしない。私のことを壊して当然とも思ってるのか？

「待たせたな、行くぞ」

「で、どこに行くんだ？」

「大きな街、場所は知らんが道なりに行けば見つかるだろう」

できれば大きな図書館があり、現在の世界事情がわかる情報発信施設がある所がいいが贅沢は言ってられまい。とりあえず人が沢山いる街ならある程度の情報を集められる。

横でヴィルトがぐちぐちと文句を言い始めるのがそれはいつものことだ。苦情なんて無視してその背に跨る、小柄な私なら上で寝られるほど大きな背中。ふさふさの毛皮が心地よい。

「後は頼んだぞ」

そういえば今日はまだ寝てないんだったな……ヴィルトに抱きつくようにして前に倒れこむと、襲ってくる睡魔にしたがい夢の世界へと向かう。

ヴィルトの体から震動が伝わってくるということは文句を言いつつちゃんと歩いているんだろう、街に着いたら少しいいものを食わせてやるのかな。

久しぶりに日光を体に受け、そう考えながら今度こそ本当の眠りについた。

第5話：頼られしモノ

「おい起きろ、夜だぞ」

ん……少し肌寒い、身を震わせてヴィルトを強く抱きしめる。

「お……おい放せつ夜だつて言ってるんだ早く起きろ、俺は一日歩いてたんだぞ！ 飯くらい食わせろ」

耳元でぎゃーぎゃー喚くな、煩い。だが仕方ないから起きてやるか。

「街についたのか？」

「そんな訳ないだろ！ 回りをよく見てみる！」

言われたままに周囲を見る、暗闇に彩られた世界に広がるのは暗緑の木々。そこから想像できる場所は一つだけ。

「森か？」

だとしたら塔からそう遠くないはずだ、こいつは一日かけてこれしか進んでないのか？ 犬のくせに遅すぎる。

「そうだ、走ろうとしても早歩きでも体が揺れるとお前は俺の首を絞めたんだ！ だからゆっくりとしか歩けなかったんだよ！」

涙ながらに訴えてくるヴィルト、まあそういう訳なら仕方がないか。

「で、飯はどうした。私を起こしたということは飯の準備ができたんだろう？」

「……俺の話を聞いてたのか？ 俺は飯を食いたいからお前を起こしたんだ」

寝起きに何か言われても理解できるはずがない。それにしても困ったな、私は別に食べなくても平気だがヴィルトは違う。体格に見合っただけの量を食べる。しかも味にうるさい。私自身も久しぶりにうまい飯が食べたいし……あいつを呼ぶか。

魔物は階級が高いヴィルトのようなものでも、一度契約をすれば高い魔力と引き換えに名を呼ぶだけで召喚することができる。しか

し悪魔にはもう一種類、魔人という種族がいる。彼らは特定の契約を結ぶことがほとんどない、しかも召喚するには特定の呪文を必ず詠唱しなければいけなかったりと面倒だ。それ故に人は魔具を用いて魔人を強制的に支配下に置く。

それから解放された魔人は人に対して強い恨みを持つてゐるから大体は人を虐殺するんだがな。今から呼ぶのはその魔人、もつとも「誇り高い魔人」というイメージからはかけ離れてゐるやつだが。

イメージするのは同じだがそこから口に出すのは名ではなく詩。

哀しく、それでいて慈愛に満ちた夜を称えし古の詩。目を閉じたまま魔力を声に乗せて謡^{うた}い続ける、ヴィルトは目を閉じて聞き入っている様に見えるが……やはり魔界のものはこういうものが好きなのだろうか。

詩が終わりにさしかかった時、それは始まる。辺りを吹き抜けていた風は止み、隠れていた月も顔を出す。

そして歌が終わった瞬間　目の前の空間に黒い染みが現れる、それはだんだんと大きくなっていき球体になった。そしてそれがひび割れ、黒が砕け散る。

「あ、マスター！　お久しぶりです！」

現われたのは私と同じく長い髪を持つ大人の女、私の髪は金だがこいつのは黒だ。ほかに特徴といたらあの胸に実った場違いな果物くらいだろう……別に羨ましいわけじゃない。

纏う衣装は黒一色であり、俗にいうメイド服だ。

「久しぶりだなリーリカ、いきなりで悪いが飯を作ってくれ。ヴィルトがうるさくてな」

「ヴィルト！？　なんであなたがここに、それよりもマスターに迷惑なんて……かけてないでしょうね？」

ヴィルトを見たその眼は一瞬だけ驚いていたが、すぐに笑顔に戻った。だが殺気は抑えてほしいところだ。

「リ、リーリカ。落ち着け、何もしてない。ただ腹が減ったって話をしていただけだ、だから落ち着け！」

「ふーん……まあいいわ、ではマスター少々お待ちくださいね」
そう言って何も言わず森の中へ入っていく、森にいることに対して言いたいことは何もないのだろうか。

しばらくすると両手いっぱい果物や野菜を抱えて戻ってきた。
そして私のバックと同じ様な構造なのかエプロンドレスのポケットから鍋を取り出し集めた食材を魔法で切り刻んだりしながら調理する。

鼻歌を歌いながら調理する姿はどう見ても魔人のそれでは無い、
じつと眺めていると顔を赤らめていたが手はしつかり動かす。最高のメイドだ。

しばらくして出来上がった料理を食べ終わったり、ヴィルトを撫でていたら眠くなってしまった。リーリカに状況を説明しなければいけないのだが……リーリカに背中を撫でられていたらいつの間にか眠ってしまった。

朝起きた時ヴィルトは恐怖に震え丸くなっており、なぜかリーリカは全てを理解していた。何があったのかよくわからないが気にしなくていいだろう。

心強い世話係も呼んだことだし街に急ぐか、丸くなっているヴィルトを蹴り起こして跨る。

「さ、今日こそ街に行くぞ」

そして私たちは街に向けて出発した、途中文句を言うヴィルトがリーリカに睨まれて泣いていたが気にしてはいけなのだろう。

第6話：語り合いしモノたち

「マスター、これまでの経緯はヴィルトから聞きましたがこれからどうするんですか？　ヴィルトに聞いても大きな街に行くとしたか答えなくて……犬は子供並みの答えしかできないから困りますよね」

「ん？　ヴィルトの言う通り私たちは大きな街を目指している。何かおかしいところがあるか？」

「え！？　いや、何もおかしくありません！　ただヴィルトがおどおど話していたので詳しい目的地を私に話せないでいるのかと思いついて、説明下手なヴィルトが悪いんです！」

なるほど、確かにヴィルトはリーリカに対して怯えているようにも見えるな……こんなおとなしい奴に怯えるなんて本当に魔物か？　「道なりに行けば街に着く、そこが小さな町でも次の街は大きいかもしれない。いつかはたどり着くだろう」

「さ、さすがマスター　ご聡明です！」

そんな焦らなくてもいいだろうに……私が聡明なのは当たり前だ。

「それよりもお前に聞きたいことがあつてな」

「はい、何でしょうか？」

ヴィルトにはあえて聞かなかったが上位の悪魔であるこいつなら知っているかもしれない……

「おまえは魔力を感じられないようにすることができるか？」

「あ、例のオルガって人の技術ですね。申し訳ございませんが私はそんなもの聞いた事もないんです、お力になれずすみません」

ふむ、つまりあれは魔界の技術ではないということか……しかしあれが人間の技術とは思えん。だとしたら人ではない何者かがもたらしたということか、それとも……

「……しもーし、マスターきいてくださーい！」

「ん、すまん。考え事をしていた」

「ボケたんじゃねえのか」

今まで黙っていたヴィルトが突然口を開いたと思っただら馬鹿な事を。

「おい馬鹿、そんなことを言っていると「ヴィ・ル・ト！　あなたマスターになんてことを言ってるんですか！　こんな若々しくかわいらしいマスターがボケているはずないでしょう、そもそもあなたは口のきき方が……」」

いきなりリーリカがすごい剣幕で　顔は笑ってるけど怖い目で怒り出した。私が馬鹿にされたのにここまで怒るとは……あいかわらず理解できない行動をする。それに事実とはいえ褒めすぎだ。

怒られているヴィルトはというと尻尾を丸めて座り、俯いたまま微動だにしない。なぜ私に刃向かうくせにリーリカには服従するんだ、納得できない。

「リーリカ、馬鹿は無視しろ。それより今後のことだがお前の意見を聞きたい、何か案はあるか？」

「あっはい、特に意見はないのですが……大きな街に着き次第聞き込みをするのは私にお任せください。それよりもマスターはオルガがどのようなものをすでに見て知っているのですから、オルガ自体を探していただいた方がいいと思います」

なるほど……たしかにオルガがまだ存在するのであれば今度こそ捕まえて調べた方が早い、やっぱり頼りになるなメイドは。

「わかった、そうしよう。とにかく次の街が小さくても大きくても、まずは魔具の売却、あとは食糧の購入だ」

「はっ肉だ肉！　忘れてないだろうな、高級肉だぞ！」

うるさい犬め……とにかく街に着かなくては話にならないだろう。だいたい歩きながら話していたから疲れているのに何でこいつらは平気そうなんだ、犬は分かるがリーリカまで。二百年塔に閉じこもったから運動不足だったのか……いや、私じゃなくこんな長い道を作ったやつが悪い。見つけたら殺そう。

「マスター！　街ですよ、結構大きいです！」

確かに街が見える、やつと着いたか。それにしても長かった、早く街に入って休まなくては。

「なにを愚図愚図している！ はやく行くぞ」

「ucci、いきなり元気になりやがって、こんなに時間かかったのはお前がのろのろしてたからだってわかってんのか？」

「ヴィールト？ マスターにそんなこと言っちゃ……」

うるさい二人は無視して先に行くか、相手にしてたら日が昇ってしまう。

見た所門は閉まっているが何とかなるだろう、自然と走ってしまふのは気のせいだ。別に大きな街が久し振りで嬉しいわけじゃない。「マスターおいてかないでくださいーい」

慌てて二人が追ってくるのを確認し、私はさらに足を速めた。何度も言うが別に楽しんではいない。

だが運動不足の私が二人より早く走ることができないのは言うまでもなく、すぐに追い抜かれてしまった。悔しい。

第6話：語り合いしモノたち（後書き）

戦闘のある話しに比べますとそれ以外の話しは短めです、更新は出来るかぎり遅らせないようにしますので応援よろしくお願いします。

第7話：休息せしモノたち

やっと街についたと思ったが、やはり門は固く閉ざされ門の外にはだれもいなかった。

「……壊すか？」

「マスター、ご名案です！ マスターを邪魔する者は全部消してしましましょう！」

「お前らはもう少し常識を持て、日が昇れば門は開くだろ……だからその火球を消せ！」

犬がよく吠える、だが門ごと街を焼き払ったら宿が壊れるかもしれんし我慢するか。リーリカはヴィルトを睨みつけているがこのやり取りにも飽きてきたな……

ヴィルトが一方的に怒られているのを眺めること約二時間、東の空に朝日が顔を出した。それと同時に角笛が鳴り響き門が開く。

「お嬢ちゃん達、まさか門があくのを待ってたのかい？」

門を開けながら出てくる中年の門兵、氣遣うくらいならさっさと門を開ける馬鹿者。

「さ、体が冷えただろう。この通りを真っ直ぐ行くと道沿いに宿屋があるからそこで休むといい」

「ありがとうございます、おじ様」

ここで怪しまれるわけにもいかんし、笑顔で挨拶。ヴィルトが体を震わせて笑いをこらえているが後で蹴る、絶対に。

「マ……お嬢様、では行きましょうか」

流星はリーリカ、街中でマスターと呼ばれるわけにもいかないしな。

やはり早朝とはいえ街は人が多い、久しぶりに人を見たせいから少し呆けてしまった。人込みをかき分けて先頭を歩いていたが、途中からはヴィルトの後ろを歩けば楽だと気うことに気づいた。流星に大きな狼を見れば人は避けてくれる、ヴィルトはショックを受けて

いたが いい 気味だ。

しばらく歩いていけると道の右側に宿屋を見つけた、そんなに広くはなさそうだが泊まるだけだし問題ない。金は……先払いだったら困るな。

「リーリカ、宿に入るのは少し待て。先に魔具を売り払う」

「はい、ではマスターはここで待っていてください。私ができるだけ高く売ってきます」

そういうリーリカは荷物の中から売るために持ってきた物だけを抜き取り袋に詰めると走って行ってしまった。

「……リーリカはどつかの馬鹿と違って役に立つな」

「馬鹿って俺の事か？ そんなこと言ってる引きこもり婆の方がひどいと思うぜ」

「なんだと……」

「なんだよ……」

こいつ、リーリカがいなくなったらいきなり元気になるなんて。それよりも何だか騒がしいな……気がつけば私たちの周りに人ばかりができていた。

「お、おい。これはどういうこと……」

「つち、この馬鹿！ 状況が呑み込めてないな！？」

「まあヴィルトったら、勝手に魔具を持ち出しちゃだめじゃない！」

ヴィルトに抱きつきながら腕を首に回す、そしてあらかじめ握っておいた魔具を取り外し、周囲の人間に見えるように手を開いて説教する。なんで私がこんなことをしなきゃいけないんだ！

「いい？ お喋りしたいのはわかったけど、勝手に魔具を持ち出したら駄目なの」

「は？ 何言っ……ワン」

また喋り出そうとしたから思いっきり睨みつけた、そこまでしないと理解できないなんてどれだけ馬鹿なんだ。大体この魔具だって犬が喋れるようになる物じゃない、これは触れたものに電流を流す拷問用のものだ。

それを見た人間どもはなんだ魔具か、高そうな魔具をもってるなあ嬢ちゃんとか言いながら去って行った。

「お待たせしました、お嬢様……この人ばかりは何なのですか？」
去って行く人の中からリーリカがひよこつと現れる、もう少し早く戻ってくればよかったのに。

「遅い！」

いきなり怒鳴られるとは思っていなかったのかびつくりしている
が私が悪いんじゃない、集まってきた奴らが悪いんだ。

よく状況を理解できていないが平謝りしているリーリカを無視して宿に入る、愛想良く店員が迎えてくれたが一切無視。

慌ててついてきたリーリカが手続きを済ませて部屋の鍵を受け取る、ヴィルトはペット扱いになったようだ。

私の前を歩き部屋のドアを開ける、八つ当たりしようにも文句の
言いどころがないじゃないか。

二つあるベッドのうち窓側の物に腰かける、さっきのことを話そうと思ったがそうするとまた長い説教が始まってしまうのでやめた。
ヴィルトに同情したわけじゃないがあれは煩くて嫌だ。

「マスター、魔具を売ったお金ですが、宿代から予想しますとかなりの金額かと思われます」

「ふむ、それはお前が管理してくれ。それと私は今夜から活動を始め、お前は明日旅に必要な物を買いつつ情報を集めておいてくれ」
「了解しました、ヴィルトはどうしますか？」

「私が連れていく、オルガとかいうのは動く時にわずかだが金属の擦れるような音がする。犬は耳がいから多少は役に立つだろう」

「俺も付いてくのかよ、今は金持ちお嬢様のペットだぜ？ ゆっくりさせてくれ」

「ペットならペットらしく主に従え、それとも似合いの首輪でも付けてやるのか？」

首輪をつけられるところを想像したのか体を震わせるヴィルト、
魔物は束縛されることを嫌うからな。

とにかく今日は眠ってしまおう、私の出番は夜までないわけだし。飯はいらないとリーリカに告げ、夜に起きれるよう時計型魔具のアラームをセットする。

となりで荷物の整理に勤しむリーリカを眺め、少し気に入ったヴイルトの毛皮を懐かしみながら布団を抱きしめて眠りに着いた。

第7話：休息せしモノタチ（後書き）

そろそろ書き溜めていたものが心許なくなってきました、急ぎ執筆しますが更新スピードが落ちるやもしれません。頑張つて執筆しますので応援お願いします。

第8話：夜闇に潜むモノ

目が覚めたとき、斜陽が窓から差し込んで部屋をオレンジに染めていた。

「あ、おはようございますマスター。もうすぐ日が沈みますのでちようどよいお時間です」

そう言つてリーリカは淹れたてなのか湯気の出ている紅茶を差し出してきた。手に持った時にまだ熱かったので口をつけない、今口をつけたら火傷するじゃないか！

ヴィルトはヴィルトで寝ているし……緊張感のない奴らだ。もしこの間より強力なやつがいたら私が負けるかも知れんだぞ、その確率はないに等しいがな。

探索へ行くに当たりいくつかの魔具を準備する、備えあれば憂いなしというやつだ。ヴィルトはまだ行きたくないとはざいているが引つ張つていけばいい。

「さて、行くぞ」

そして窓の外が夕闇に包まれた頃、私とヴィルトは窓から抜け出した。宿の主人や住民にはわからないよう慎重に。

外に出たらまずは跳躍、宿の屋根へと上る。物を探すときは高い所から探すのが一番だ。

「どうだ、例の音は聞こえるか？」

「いや……何かを吸い込む音も金属音もしない。だけど火薬の匂いがするぜ！」

火薬、それを用いるといったら軍しかない。あれほど強力なモノを軍が知らないはずがない、軍人でも捕まえて聞き出すのが手っ取り早いかな？

屋根を跳び火薬のする方へとヴィルトの先導で進んでいく、私に合わせて走るくらいなら乗せると言いたくなる。

「あれだ」

しばらく進むと倉庫らしき建物の上でヴィルトが立ち止まり呟く、その視線の先にあるのは屋敷の様だ。身をかがめて覗き込むが遠くでよく見えないじゃないか、仕方ない……バツクから一つの魔具を取り出す。唯の望遠鏡に見えるこいつだが、夜でも昼のように明るく見える代物だ。

それを使つて数百メートル離れた屋敷を見る、別におかしいところはないようだが……ん？ 馬車の隣にいるのはまさかオルガか！？ この間見た奴とは形が少し違う、こいつの方が少しスリムだ。しかし感じる威圧感が変わらない、動く気配は感じられないがそばに兵がいることから見て奴も軍に所属してるんだと考えた方がいいか。

「どうする、突っ込むか？」

「馬鹿かお前は、とにかくあの軍人の中で階級の高そうな奴を拉致するぞ」

ヴィルトが何か言おうとしたがそれを無視して飛び降りる、ここで魔法を使ったら感知されてしまうだろう。それはヴィルトを連れていっても同じだ、魔物に対する感知魔法は大抵の金持ちが屋敷にかけてるからな。

倉庫の下から屋敷までの道は脇に並木があるのでそれに隠れながら進む、門の所にいるのは普通の兵みたいだが……門を避けて塀を越えるか、それとも兵を気絶させて堂々に入るか。うん、こそこそするのは私の主義に反する。

魔力が漏れないよう細心の注意を払い足と腕に魔力を込める、目標は門にもたれてるだらしない男一名。

足の裏から魔力を放出し、それと同時に地を蹴り一気に門まで走りぬける。要は見つかる前に掻つ攫えばいいのだ。

驚いたのか寝ぼけているのかかわらんが呆けている兵の頭に掌を当て魔力を放出、崩れ落ちる体を蹴り飛ばす。しばらくは起きないだろうし放置だ。

さて、目標は……調度いい、オルガの所に男が二人話し込んでい

る。若い男は胸に勲章をつけているが、もう片方は太っていて威張っている。たぶん太っているほうが上官だろう、あんなのに命令される若者には同情してしまうな。

さっきと同じ方法で近づき相手にふれ転送魔法で離れた場所に移動する、拉致するだけならこれでいいだろう。オルガが動き出して妨害してこないか心配だが……まあ大丈夫だろう。

先ほども多くの魔力を足に込める、若い方が跳ねるようにこちらを振り返った……ばれたか！？ 思いつきり魔力を爆発させる、ばれてしまったなら加減する必要もあるまい、一步、二歩、三歩。数十メートルの距離を一瞬で零にする。いかなあ、敵の前でそんな焦った顔をするとか殺されるぞ青年。

だがいま注目すべきは青年では無い、急いでオルガの方を見るが動き出す様子はないみたいだな。なら成功したも同然、デブの首をつかんで魔力を集中させる。

「貴様何者だ！ 大尉を……」

いまさら銃を抜いても遅い、それにそのまま撃ったら貴様の上官にあたるぞ。

「じゃあな少年、こいつを少し借りて行く。転移^{ゲート}」

流石に二人となると詠唱入らなくても『名』を口に出さなければ無理だな、霞みゆく景色の中で少年がオルガに向かって走っていく。しかしもう遅い、オルガが動いた瞬間私たちは完成した呪文で街の外にある山へ転移した。

「ひっ き、貴様私を誰だと思っている。私はイエルグ大尉だ……っぐあ！」

うるさい豚だ、ギャーギャーとよく鳴く。煩いから殴れば今度はじたばたと暴れ出すし忙しいやつだ。

「おい豚、私の質問に答える。答えなかったら殺す、答えられなくても殺す。いいな」

「ふんつ、私がそう簡単に軍の機密を話すとても」

また偉そうに何か言う気だったのか、状況把握も出来ないほど低脳な豚め。まあ体すれすれのところに地槍^{エキゼ}を出したらおとなしくなった。

「次に無駄口をたたいたらそいつでお前の尻から口を貫く、わかったか？」

手で口をふさぎながら強く頷く顔は滑稽^{こっけい}としか言いようがない。

「まず一つ目、オルガとは何だ」

「貴様オルガの事もしら……」

「いいから答えろ、死にたいなら別だがな」

今明らかに私を馬鹿にした目でこちらを見てきた、そんなにオルガは有名なのか？

「オ、オルガつてのはな、十年くらい前にどっかの博士が遺跡で見つけた古代兵器だ。それを今の技術で量産してるって話だが詳しいことは知らん、詳しいことは軍の上層部の奴らしか聞かされていない。ほ、本当だ！」

「ふむ、それではオルガは人口生命体という事か？」

「いや、確かにオルガ自体生きていると言う学者もいるが詳しいことは分かっていない。ただあれを動かすには純度の高い魔導石とそれの使い手が必要ってことだ。素材が希少な鉱石と言う話もあるし量産はされているが数はそんなに多くない、だが個々の能力は貴様のような魔法使いが敵うもんじゃ」

それだけ分かれば十分だ、それに私如きの魔法使いじゃ無理？

いいだろう、屋敷にいた奴を潰すことで実力を見極めてやる。

それにな、そういうことを言うから貴様は死んだんだ。そのことをそこで後悔し続けるがいい。

体を地槍で串刺しにされた豚をその場に残しヴィルトの元に戻る、もうばれているだろうし転移でいいだろうか。

「待たせたな」

「つびつくりするから背後に転移するな！」

倉庫の屋根の上で待っていたヴィルトに豚から聞き出した情報を説明する、どうやらオルガというものは人が搭乗し操作する物らしいという事。つまり中の人間を殺せばオルガも止まるということだ。

『見つけたぞ小娘、大尉をどこにやったあああ』

ヴィルトと座って話し込んでいたので警戒がおろそかになっていたか、先程の青年らしき声が聞こえたと思った瞬間、下からオルガが跳躍してきた。

ふん、今回は腕の一本くらい持ち帰らせてほしいものだ。動かし
ている青年もあれくらいで冷静さを欠くほど精神的に未熟だ、これ
なら手加減しても十分だろう。

ヴィルトの背中を一撫でして夜空へ飛ぶ。

地へ飛び降りたヴィルトも魔力を纏い戦闘態勢をとる。高々と飛
び上がったオルガが屋根をへこませながら着地した鈍い音、それが
戦いの始まりとなった。

さあ古代兵器オルガよ、戦いの円舞曲^{ワルツ}を共に踊ろうじゃないか。

第9話：宵闇に舞うモノ

空中からオルガを見下ろす、先程の跳躍から前回のオルガとは比べ物にならない機動性を持っていると推測。やはり個々で性能が異なるのだろうか。

『答える！ 大尉を、大尉をどこに隠した！』

煩いガキだ、やはり煩い豚の元で働いていると部下もつるさくなるのだろうか。悪循環だ。

「あの豚なら見晴らしのいい山だ。そんな事より坊や、オルガを私に出来ないか？ そうすれば見逃してやろう」

ま、無駄だろうが一応は交渉を持ちかけてみる。弱い相手にも基本的に情けをかけないがオルガは無傷でほしい。

『ふざけるな小娘、たかが魔法使い如きがオルガに勝てるはずがない！』

猫科の大型動物を連想させる体躯のオルガが私に肉薄する、だが私ばかり見ていてはだめだ。上空にいる私に攻撃しようとするが失敗に終わる、直線状にしか動けない奴が空中を自在に飛べる私に攻撃しようなんて無理なことだ。ま、私が避けるまでもなく横からヴィルトが飛びかかり奴の進行を阻止したわけだが、

もつれ合うようにして落下する二匹（？）、地面に激突する直前に離れて距離をとった。先に地面と接触したヴィルトは巧みに軌道を変えトリッキーな動きで近づいていく、しかし敵のオルガもヴィルトの間合いに入る前に自らヴィルトの方へ跳びすれ違うように攻撃を避ける。

奴は接近戦を好むのか、先程も上空にいる私に直接攻撃しようとしてきた。もし遠距離の標的に対する攻撃手段がないのなら私はここからヴィルトを援護した方がいいか……しかし奴らがいるのは火薬の詰まった倉庫の前だ、炎が引火するとヴィルトどころか私にまで被害が来る可能性もあるので煉獄は使えない。もしかしたら奴も

火薬を気にして遠距離攻撃をしないのか？　だつたら好都合だ。

私の目的は奴の、オルガの体の一部を手に入れること。なら今使すべき力は捕縛し、その肉を削ぎ落とす力。魔力を紡ぎ織りなすのは何物にも縛られず、それでいて全てを束縛する風の力。

両腕を胸の前にかざし魔力を込めた風を練り上げ、掌に収まる大きさの球に圧縮する。

ウァンティン
「風鎖」

私の手から零れ落ちた球は決して早いとは言えない速度で地に向けて落下していく。その間もヴィルト達は互いの攻撃を避け続けるのに必死でこちらに気づいていないようだ。

奴らがいったん距離をとり、再び攻撃を仕掛けようとした瞬間地に触れた風鎖が破裂し、圧縮されていた風が解放される。それは瞬く間に奴らがいた一帯を包み込み、ヴィルドも巻き込んで魔法が展開される。

『なっこれは』

「トリス、なんで俺まで！」

解放された高密度の風が全方向から体を締め付ける。魔力を込めた風の檻、これを力任せに破るのは不可能に近い。

「さて、私がほしいのはオルガだけ。お前はいらない」

ゆっくりと降下し奴らの前に降り立ち、ヴィルトの首に触れ檻から解放してやる。残されたオルガは何とか抜け出そうと足掻き続けるが無駄なことだ。

ではその体を貰い受けようか。この場に充満している風を腕にまとわせる、未だに魔力を帯びたこの風を刃として奴の体を切り刻ませてもらふ。

しかしこの間の奴と同じく強力な一撃を放つことも考えられる。腕を振り上げ奴を両断しようとした瞬間、ヴィルトが叫んだ。
「！！　トリス、例の音がするぞ！」

例の音……あの何かを吸い込む音か！　私の勘ではそれが大気中の魔力を吸収しているんだと思う、だとしたらこの場にいるのはま

ずい。腕を振り下し刃を奴に向けて飛ばし、瞬時に障壁を張る。もしもの時に備えて三重に障壁を展開。

障壁の展開が終わるとほぼ同時に奴を捉えていた風鎖がはじけ飛ぶ、奴は風の刃から逃れるべく横へ跳んだ。

風が砂を巻き上げていく見ええない、いったい奴は何をしたんだ。風鎖を破るほどの力を使ったにも関わらずこちらに光線等の攻撃はなかった。魔力を何に使ったんだ……

砂煙が収まった時、少し離れた所に立つオルガの姿は先程までとは違っていた。背中や腹、腕の関節や眉間など体のいたる所から光の刃が生えていたのだ。

『まさかこれを使う事になるとはな……小娘、貴様だけは絶対に許さん！』

そう言う奴の足は一本なくなっていた、先程の刃を避けきる事はできなかったかようだ。しかしあの光でできた刃は危険だ、おそらく私の風で作った刃と同質の物だろうが魔力の密度が恐ろしく高い。あれなら風鎖を破ったという事も納得できる。

足を失ったことでスピードは落ちているものの十分早いといえるスピードで迫ってくる、そこに風の刃を打ち込みつつ後退。ヴィルトにあの刃を防ぐ術は無い、当たれば肉を抉られ致命傷を負ってしまう。ならば私が奴を引きつけているうちに奴の足を回収させた方が効率的だろう。

私の考えを魔力に変換してヴィルトへと送る、こちらを見て頷いたという事はしっかりと伝わったという事か。

「どうした、そんな物を体から生やした程度では私に傷をつけることすら不可能だぞ！」

襲いくる刃を風と障壁で防ぎながら全力で後退する、飛翔してしまつたら標的がヴィルトに移ってしまうので逃げることはできない。低空飛行を続ける私の下から奴に向けて地槍を連続して作り出す、『名』を唱えるための集中を許されないので強力なものは作りだせないが足止めをするには十分だ。

「トリス！」

奴の足を咥^{くわ}えたヴィルトが私を呼び駆けてくる、オルガもそれに気づき足を……情報源を渡すまいとヴィルトへと疾駆した。私に背を向けるという事がどれだけ愚かな判断かわかっていないようだ。足が回収できたならもうこいつに用はない。この場に残っている風を全てかき集め奴の背中へと飛ばす、螺旋を描きながらオルガに直撃した風はとどまる事を知らないように吹き続け奴を足止めする。イメージするは悲しみ、すべてを凍てつかせる負の力。望むは全てを封じる氷の棺。

アルギューベオス
「さよならだ坊や、電衣」

風に乗って小さな氷の粒がオルガへと降り積もる。一つ一つはすぐに溶けてしまうが、それが連続して降り注ぐなら別だ。甲殻がだんだんと凍り始め、風が止んだ時に残ったのはオルガの姿をした氷像だけだった。

「待たせたなヴィルト、ところでこいつの足は無事か？」

「ああ、ここにあるぞ」

ヴィルトに渡されたオルガの足は鉱石できていた、鋼では無い、しかしそれよりも硬く軽い。だがこれが鉱石かと問われたならそうだと即答することはできない。これからは何か生々しいものを感じるのだ。

「き……ま、て」

背後からかけられた声に反応してヴィルトが瞬時に私を守るよう立ちほだかる、だがその必要はない。なぜならその声は氷像から聞こえているのだから、氷漬けにしても生きているとは……オルガは防具としても優秀だという事か。

「生きていたのか……今回は目的も果たしたことだし見逃してやろう。次に会うときにはせめて私に触れることぐらいできるようなっている、そうすれば相手位してやらんこともない」

それだけ言ってヴィルトの背にまたがる、今日は少し魔力を使いすぎた……早く宿に戻って寝たい。

宿に戻るとリーリカにオルガの足を渡し服を脱ぐ、久しぶりに疲れたからシャワーも普段より気持ちよく感じるだろう。

部屋にへたり込むヴィルトと足を様々な角度から眺めるリーリカを尻目に、部屋に備え付けられた浴室へ入る。井戸じゃない、シャワーだ。

久しぶりに入るシャワーに対して密かに喜びを感じつつノズルを捻った。あとは明日リーリカがどんな情報を仕入れてくるかによるが私はゆっくりさせてもらおう。

ネグリジエを着てベッドにもぐりこむ、ヴィルトもリーリカが先ほどまで寝ていたベッドの上で丸くなってる。次に目覚めた時はあの足を調べてみるか、そう考えながら私は眠りに着いた。

第9話：宵闇に舞うモノ（後書き）

更新遅くなってすみませんでした

第10話：市を駆けるモノ（前書き）

今回はリーリカ視点です、ちょっとコメディーな雰囲気ですがお気になさらずお読みください。

第10話：市を駆けるモノ

マスターってばオルガの足を片手に戻ったと思ったらシャワーを浴びてすぐに寝ちゃいました……少しくらい話し相手になっただけじゃなかったです。

マスターたちが帰ってきたのは今から1時間くらい前でした。マスターの魔力を感じたのでベッドから出てお茶の準備をしたのですが、戦利品を私に投げ渡された後はこっちを見てもくれませんでした。悲しいです。ヴィルトはヴィルトで私のベッドを勝手に使っているし……許せん！でもマスターのお手伝いをしてくれたので怒るのは起きるまで待つてあげます。

日の出まで後2時間くらいでしょうか、今から寝ても市場が始まる時間に起きる自信はありませんし……仕方ないので起きていることにします。ですがそれまで何をしていますよ、暇を潰すものがないので困りますが、いいことを思いつきました！マスターが塔から持つてこられた圧縮バック、あれの整理をしましょう。いくら沢山の物が入るからといっても整理をしておかなければ必要な時に見つからないなんて事もありますから、それにどんな物を持つてこられたのか気になります。

テーブルの上に置かれたバックを床に置いて中身を出します、ひっくり返して出すと量によっては部屋が凄惨なことになってしまいますから。上から順番に、バックに手を入れて取り出します。

中から出てくるのは様々な魔具と魔導書の数々、貴重な物なのでもう少し丁寧に扱って欲しかったです。それとこれは、普段は着ていただけないフリフリドレス！あんなに嫌がっていたのに持ってきて下さるなんて感激です、黄金の髪に似合う黒のお召し物……想像しただけで興奮してしまいます。

その後もかわいらしいお召し物が出てくるたびに抱きしめたり妄想していたら、いつの間にか朝になってしまいました。好きなこと

をしていると時間が経つのが早いですね……もう半日ほどお嬢様のお召し物でいろいろしていたかったのですが、買い物に行かねばなりません、市場は朝に行かなければいいものが買えませんから。

部屋を出てフロントへ行くとすでに宿のご主人が起きて朝食の準備をしていました。

「おはようございます」

「おっもう起きたのかい、はいいねえ」

「はい、お嬢さまがお起きになられるまでに買い物を済ませてしまおうと思ひまして」

「あんたも若いのにえらいねえ、それならいいことを教えてあげよ。街の西と東両方に市場があるんだけどね、東の方が店が多くて欲しいものがそろうんだ。西は主に金持ちのための飾り立てた粗悪品ばっかだからね」

「そうなんですか！ 教えてくださりありがとうございます、それとお嬢様は朝食は召し上がらないので起こさずに寝かせておいて下さい」

もし寝てるところを起こしたら、この街どころか国ごと消しそうな気がしますからね。

「はいよ、じゃあ氣をつけて行つてきな」

軽く会釈をして宿を出る、思いがけないところで時間をとられてしまいましたがい情報をもりました。さっそく東の市場に向かいます。街を四つに区切るように走る二つの大通りが交差する所までいくといい香りがしてきます、急がないといけないかもしれまんね。

市場に着くと大勢の人が所狭しと犇めき合っていました、何度か人間界の市場に来たことはあるのですがマスターの住んでいた塔の近くにある町のはこんな人はいませんでしたからびっくりです。

とにかくいい品物が残っているうちに保存のきく食べ物を買わなければ！ マスターのバックは圧縮して多くの物が入るとはいつて

もサイズを小さくしているだけなので時間がたてば食べ物も腐ってしまいます、あのなかで何かが腐ったりしたら……想像しただけで寒気が。

ドライフルーツを数種類と干し肉も少しだけ買い込み袋に入れてもらう、私はマスターにいただいた魔力があれば食べなくても平気ですしマスターも食べ物はいくら口になさらないので片手に抱える袋だけでも一月はもつでしょう。

昨日マスターのお造りになった魔具を売ったのでお金はありますし、何かいいものがないか見て回っていきましょう。もしかしたらマスターによく似合うかわいらしい帽子とかが見つかるかもしれません。

様々な食品が売られているお店の集まりを抜けると雑貨市のような場所に出ました。コップやお皿の様な食器から怪しげな刃物までいろんな物があるようです。一つ一つのお店を見て行っただけですがその中に気になる物を発見しました、普通の人には感じられない魔力　これは魔具じゃないですね、普通の道具に無理やり魔導石を埋め込んだだけの物って感じがします。マスターはこういう怪しいものが好きなので購入しておきましょう、褒めてもらえるかもしれません！

あとはこれから何がおこるかわかりませんし、今の技術で作られた魔具をいくつか購入します。それを見てマスターが魔具を造ると言い出した時のために魔導石と材料も買っておいの方がいいでしょうか、材料はいくつか種類があるのでまとめ買いしておきます。

魔力伝達性の高い鉱石サンギリアと封印石であるルナーリア、あとは形を整えたりするために鉄を少々。それに魔導石も必要ですね。

魔導石は流石に需要が高いですから専門店があります、品質は上級のものから下級のまで扱っていますが下級のものではせいぜい食料を冷やすための魔冷機程度のものしか作れませんし……マスターが作るもの考えると上級の物を3〜4個と中級の物を20個も買

えば十分でしょうか。ちなみに魔導石一個の値段は上級が百万アーペ、中級が二十万アーペくらいですがマスターが作った魔具を売った総額が二千万アーペだったのでお金には余裕があります。マスターの作ったものはどれも高品質で性能が高いそうで、私のことではないですが喜んでしまいます。ちなみに家一軒建てるのには三百万アーペくらいだそうです。

あとはこれからの行動のために地図と近代魔法の魔導書を買って買い物は終了。

オルガについて聞き込みもしたのですが、皆さん口をそろえて「オルガはオルガだよ」と仰るので大した情報を得ることもできませんでした、申し訳ございませんマスター。

買い物も終わり、時間も昼ごろになってきたので宿に戻ろうとしたとき後ろから声をかけられました。

「よお姉ちゃん、荷物たくさん持って大変そうだな。どうだい？ おれたちと遊んでくれるならその荷物を少しくらい持ってやるぜ？」
うるさい人たちです、広いとは言えない道の真ん中で私を取り囲むように5人が立ちほだかりました。急がなければいけないので無視、虫です。

「つち、待てよ！」

さつきから話していた男が私の腕を思いっきり引つ張ってきました、はずみで荷物が落ちちゃったじゃ……！！これはマスターのために買った帽子　許せません。

かと言って私が攻撃したら人間なんて簡単に死んでしまいます、そうなればマスターにご迷惑をおかけしてしまう……それだけは避けねばなりません。

ほかの男たちも私の腕をつかんで……マスターの帽子を踏みましたね！　全身から魔力を放出、その衝撃で男を吹き飛ばします。そして魔力を練り上げ大気に溶け込ませ、それを男が呼吸をする時に吸い込めば終わりです。今は気を失っているだけです。少し経てば起きるでしょう、その時に吸い込んだ魔力が男の体を内側から滅

ばす仕組みです。まあその時には私がいなくなっているので追われる心配はないでしょう。

「驚いたな……嬢ちゃん魔法が使えるのかい」

「ええ、少しだけです」

そばにいた商人の方が驚いて声をかけてきます、この時代では魔法を使える人が少ないのでしょうか。ですがそんな事を考えている場合ではありません、宿を目指してはします。

ああ、遅くなってしまいました。ですが今度は皆さん道を空けてくれます、どうしたのでしょうか？

宿に急いで戻ったので少し疲れました。宿の主人さんは私の荷物を見て、慌てて手伝おうと近寄ってきましたが会釈をして部屋に行かせてもらいました。両腕に鉱石やその他の荷物を1メートルくらい持つてただけで手伝おうとしてくるなんて人間の方々とは親切ですね、魔界では5メートルくらい持つて歩く人がほとんどなのでだれも手伝ってくれませんでしたから。

部屋に着くとマスターは既にお起きになっていて、ベッドの上で胡坐をかいて座っていました。ああ、ネグリジェから見える太ももが目にもぶしいです。

「遅かったな、リーリカ」

「申し訳ございません！ 煩い帽子が男を踏んでひたので……」

あう、マスターに見惚れてたから言葉が変に、しかも噛んでしまいました。マスターは頭の上に『？』を浮かべて困っています。そんなお顔もかわいいです。

とりあえず買ったものの報告です、食料品はどうでもいいそうなので魔具とその材料。今の時代の魔具は何かの魔法を封じ込めておける物らしくマスターは興味を持たれていました、買ってきてよかったです。

「これは……」

マスターが例の変な道具を手にとりました、魔力が漏れているので気になったみたいですね。私がそれを見つけて購入した経緯を話すと一つ頷いて道具を地面に投げつけました。

壊れた道具は破片となつて散らばってしまいましたが、その中に一つだけ目を引くものがありました。

魔導石です。群青色のそれはとても純度が高く、これほどのものは見たことがありませんでした。マスターもそれを手にとって様々な角度から見えていましたが満足そうにうなずいています。何か思いついたときの顔をしていてちよつと不安になりますね。

あとは貰ってきた地図を広げてこれからの相談ですね。テーブルの上にはオルガの足と地図、これからマスターはどんな作戦を立てるのでしょうか。

ちなみに、まだ寝ていたヴィルトはベッドから蹴り落としました。その後魔力波をぶつけようとしたが避けられてしまったのです。

残念。

第11話：悩めしモノたち

リーリカの持ち帰った道具に入った魔導石、異様に純度が高いこれは何かに使えるだろう。昨日聞き出した情報ではオルガを動かすために必要だという事だしいろいろと調べさせてもらおうか。だがこのまま魔力を漏らしていれば奪われる可能性がある、純度の高い魔導石は貴重だからな。しかもこれは店で売ってる上級品なんかとは比べ物にならないほど純度が高い、伝説級の代物だ。

面倒だが封印しておいた方がいいか、壊してしまったあの道具には魔力を漏れないようにする働きがあったようだ壊してしまったし……ああ面倒だ。魔具の材料にと買ってきたルナーリアと一緒に箱に入れて魔法をかける。

「むっ」

何だと……私の魔法がはじかれた？ そんな馬鹿な、私の魔法がはじかれるなんて まさか！ 伝説の中に意思を持つ魔導石というものが書かれていたがこれがそうなのか！？

しかし私に歯向かうとはいい度胸じゃないか、だが封印魔法が聞かないならどうすれば……ああ、こいつには意思があるんだったのなら説得すればいい。

「マ、マスター 口をひきつらせながら笑うのは怖いです」

「気にするな、すぐに終わる。何、苦しむのは一瞬だ。おい石、その魔力を抑えろ」

手に持った魔導石に語りかける、他人から見たら馬鹿に見えるかも知れんが……みた奴は殺そう。む、放出される魔力が増えた！？ こいつ私を挑発してるのか？

「ふ、ふふふふふふふふふ」

リーリカとヴィルトが部屋の隅に逃げていく、まあ今は無視するか。まずは現在進行形で魔力を放出し続ける石だ、魔力が常時精製されているのはわかるがそんなに放出したら精製量を超えているだ

ろくに、そんなに私の言う事を聞きたくないか。

魔導石に魔力を送る、魔導石に魔力を送る事で魔力を増幅するのは世間一般でいう普通の使い方。だが魔導石の限界量を超える魔力を送り込んだらどうなるんだろっなあ？

力を制限することなく全力で魔力を送り続けていると魔導石の顔色が変わった、放出していた魔力が燐光を纏い明滅する。まさか喧嘩を売っておいて壊されることを考えていなかったのか？ 甘い、甘すぎるぞ石ころが！ 問答無用で魔力を送り続ける。

「お、おいそんなに魔力を込めたら壊れ」

「黙れ」

慌てて止めてくるヴィルトを止める、睨みつければ黙るとは素直な奴め。強いものに従うのは当然だ、そろそろこの石もそれを理解するべきだと思う。

あと少しで本当に壊れるだろう、一気に片をつけようと両手で握ったときに魔導石から魔力の放出が止まった。どうやら理解したようだな。

「リーリカ、これをアクセサリーにでもしてくれ」

大人しくしてくれているなら人に見られても平気だろう、下級の魔導石でも魔力の放出はあるのに今では全く魔力が漏れていない。誰が見てもただの宝石だ。リーリカは投げ渡された魔導石を眺めてにやにやしている、今度は何を妄想してるんだ？ ま、まあ聞けば答えてくれるだろうがあえて聞かないでおこう、別にその答えが怖いわけじゃない。

「……に似合うのは…白い首筋に…ああ、そんな大胆な！」

訂正しよう、少し怖い。

「リーリカ、この街は何という名だ？」

今はこれからのことに集中だ、現実を直視したくないわけじゃないぞ！

「はあはあ……えっあ、はい、聞いたところによるとここはコテフという街です」

ついリーリカの方を見てしまった、だが鼻血なんて見ていない、
見ていないぞ。だがコテフか……地図の右下、大陸の四分の一
南東部を領土とするこの国シューレの中でも端にある辺境の街だな。
どこに行けばオルガの事を調べられるか……

「なあトリス、この足なんか臭くないか？」

「ん……言われてみれば確かに、よく気づいたな」

ヴィルトは机の上に顔を出し熱心に足の匂いにおを嗅ぐ、こうしてみ
ると変態だな。俗にいう「においふえち」という奴だろうか。

だが匂い……そんなものが鉱石にあるのだろうか、私も顔を近づ
けてわかったが僅かに刺激のある匂いとする。

「よし、ヴィルト。任せた」

「は？」

首をかしげるヴィルトの傍にあつた蠟燭の火に手をかざし呪文を

唱える。

「アサール
炎断」

風刃とは違い炎自体が剣の形を作っていく。それを構え机に向き
なおる、ヴィルトは机を挟んだ向こう側にいるのだが目を丸くして
こちらを見ている。

「おい、待て！ まさかあの世でこれの素材を探せとかいうんじゃないだろうな！？」

む、その手があつたか。だがあの世なんてどうでもいい、必要な
のは現実的な物だ。握った権をテーブルに置かれたオルガの足へ振
りおろす、しかし剣がはじかれてしまった。込めた魔力が少なかつ
たのか？ とにかく魔力を込めてもう一度、今度はちゃんと切れた。
それを何度か繰り返し、足を数個に切り分ける。切り分けたそれ
は小袋に一つずつ入れてバックの中へ、何か必要な実験の時に使え
ばいいから切り分ければいいし、ヴィルトを使うためにもこの方が
いい。本人は理解してないようだな。

バックに詰めてから地図に印をつける。『鉱山の町ネスト』シュ
ーレの北部に位置する街だがこの国で鉱石が多くとれるらしい、原

石を探せば早いだろうな。

そしてもう一つ地図に印をつける。ここからそう遠くない、少し北に行った所にある海に面した町『海風の町ミリヤ』。ここには知り合いがいる……まだ生きていれば役に立つだろう。

行き先が決まったからリーリカに言おうと思ったが、リーリカはどこから出したのか金銀を細工してネックレスを作ってる。金銀まで買ったのかこいつは……

きつと声をかけても反応してくれないだろう、ヴィルトもリーリカを見た後に首を振った。諦めるしかないか、ヴィルトとの相談の結果リーリカも朝になれば作業も終わっているだろうと今日も寝ることにした。

ん？ お前さっき起きたばかりじゃないかって？ 何を言っている、寝れば寝るほど肌は奇麗になるのだぞ。という訳で一眠り、抵抗するヴィルトを抱きしめてベッドに寝転がる。さて、明日から忙しくなるぞ。

第12話：別れしモノ

「それでは、これからの事を話そうと思う」

早朝、目が覚めるとリーリカが完成したペンダントを片手に寝ていたので起こし、二人を伴って街をでた。

町を出て少し歩いたところに適当な大きさの岩があったのでその上に腰を下ろし話を始めたというわけだ。

「まずはこれを見てくれ」

バックの中から地図を取り出し二人の前にかざす、ヴィルトは昨日見ていたから分かっているだろうがリーリカには説明せねばわかるまい。

「まずこっちの印、ここからそう遠くない街だがここには数十年前塔を訪ねてきた奴が住んでいると言っていた所だ。そいつは研究者だとか言ってたから生きていれば利用できるだろう」

そう言いながらミリヤの町を指し示す、二人とも目を丸くしてるがそんなに驚くことか？

「おいおい、あんな塔に人が来てたのかよ
そっちか。」

「ああ、魔女に会ってみたかったらしい。少し脅かしてやったが頑なに帰ろうとしなかったんで少し話に付き合ってたただけだな」

あの時は魔女狩りと言って来る馬鹿が時々来たから間違えて殺しかけたんだっとな、うん。

「まあいい、続きを話すぞ。そしてこっちの印だ、こっちは鉱石の採掘と加工がおこなわれているネストと言う所だ。ここにはヴィルトが向かう」

うんうんと頷きながら聞いていたヴィルトの動きが止まる。もしかして言っただけだったか？

「っ初耳だ！俺が一人で行くっていつ決まったんだ！？」

「昨日？」

「俺が知るかつ、それにどうやって行くんだよ、走って行けつてか！？」

「そのことなら心配しなくてもいい、転送するから一瞬だ。ただ行つたことがないから誤差が……いや、なんでもない」

「なに口ごもってんだ！？」

「いつになく元気だな……まあ送つてしまえばこつちのものだ。ヴィルトに手を伸ばそうとすると危機を悟つたのか慌てて私から距離をとる。」

「おいおいどうしたんだ？ そんなに離れなくてもいいじゃないか」
私が立ち上がると警戒して魔力を纏つた、そんなに警戒しなくても攻撃なんてしないさ。なぜなら……

「マスター、捕まえました」

「なっ、いつのまに！？」

私に集中しているヴィルトは背後に回り込んでいたリーリカに気付かなかつたみたいだな。リーリカはああみえてパワーも凄い、ヴィルトじゃ逃げられないだろう。

恐怖に顔をひきつらせるヴィルトにゆっくりと近づく、そんな顔をされるといじめたくなってしまうとわからないのか。ヴィルトの目の前まで行くとそつと首を撫でる。

「ト、トリス？」

不安げに見上げてくる顔はかわいいなあ、だがやる事は変わらない。バックから首輪を取り出しヴィルトに着ける、こんなときのために作って置いた魔具だ。

「似合うじゃないか、それにこれは離れていても魔力が供給できるという優れたものだぞ」

「うっ……魔物なのに、これじゃ飼犬と変わらない。いつそ殺してくれ……」

その首輪にオルガの足（一部）を入れた小袋を首輪に付けてやる、これで匂いを確かめる事が出来るだろう。

「何かわかつたら念話で知らせてくれ、頼んだぞ」
テレパス

それだけ言って転送させようと手を触れる。

「ま、待て。俺は念話つかえないぞ。だから俺が行くのはやめた方が」

「大丈夫だ、それも首輪でできる。呪文も唱えなくていい、ただ私に伝えようとするだけでいいんだ。便利だろう？」

最後の希望を失ったかのようにうなだれるヴィルトを無視し転送する、位置がよくわからないから勘で。距離が長いから消費する魔力も多いがまた寝れば回復する、最近では消費する魔力が多いから寝てばかりいるな……

「それとリーリカ、手伝え」

バックの中からリーリカが買ってきた魔具を取り出す、こいつがどんなものか知っておきたいからな。

それについている説明書によると筒状の魔具の横にあるボタンを押すことで、それに入れてある魔法が一度だけ使えるらしい。魔法の名前に聞き覚えはないが一緒に買ってあった魔導書『まるわかり初歩魔法』を開いて調べながら使おうとしよう。

「まずは……この水呼クウォーターという奴を使ってみるか」

リーリカを対象に解放する、まあ水を大量に出すだけの魔法らしいが念のため障壁を張らせておく。

「わっぷ」

障壁を通り抜けてリーリカに水が降り注いだ、障壁が聞かないという事は魔力がこもっていないのか……ふむ、ただの水を呼び出すとは召喚魔法の類みたいだな。仕組みとしては封印石であるルナリアに制御用クリスタルを取り付けただけの簡単なものだが発想が面白い、弱い魔法しか入れられないようだがこれを応用すれば……ふふふ、面白いものができそうだ。

他にも閃光等ケルスの非戦闘用魔法があつたが価格も安く旅をする商人たちの必需品らしい。

これ以上やっても無駄に時間が過ぎてしまつしそろそろ行くとするか。

荷物をしまいなおすと私はリーリカを伴いミリヤに転移した、ヴ
イルトが何かつかむ前に私たちもそれなりの事を調べておかねば面
目が立たないしな。

第12話：別れしモノ（後書き）

読んでいただきありがとうございます、狭間です。

最近暖かくなってきましたが皆様はいかがお過ごしでしょうか？

私は風邪をひいております、ぐすん。

いまだにトリスのフルネームが出せなくて嘆いていますが、いつか出しますのでお待ちくださいませ。

第13話：訪れしモノたち

ミリヤの傍にある丘に転移した私たちは濃い霧の中を黙々と進んでいた。なぜ直接ミリヤに転移しなかったかつて？ 愚問だな、町中に人がいきなり現れたらパニックになるだろう、その町に奇襲をかけて滅ぼすならその方がいいが今回はなるべく騒動を起こさずひっそりと行動したいのだ。ならば旅人を装って進入するのがベストだとは思わんか？

それにしても凄惨な霧だ、すでに私もリーリカも服が海に落ちたのかと思うほど濡れている。つく、少し寒いな……早く町に入って何か温かいものを飲まなくては風邪をひいてしまう。不老のくせに病気にはなるし傷の治りが早くなるわけでもない中途半端な体が憎らしい。

「ん……！？ お嬢さん方大丈夫ですか？」

門に近づくともまだ兵士になったばかりなのか、身につけている鎧のせいであまり動けないようだが懸命にこちらへと歩み寄って来る。なんというかお前こそ大丈夫か？ と聞きたくなるな。

「私は大丈夫ですがお嬢様が……」

リーリカが近づいていき私を後ろに隠すようにして会話を進める、私は話すなと言う事か？ 失礼なやつだ、私だって二百年前は人間だったんだぞ！ それなりの会話くらいできる！

「人を訪ねて……来たのですが」

よろよろとリーリカにもたれかかり、息も絶え絶えといった感じで兵士を見上げる。賞が取れるくらいの名演技だろう。ん、リーリカどうしたんだ？ なんで私を見て顔を青ざめて震えて……

「あなた！ 今すぐお嬢様を医師の所へ、何ぼさつと突っ立っているんです！？ 早く案内してください！」

なっ、リーリカお前が誤解してどうする！ リーリカに担がれて町の中に運ばれていく途中、なんとかリーリカに演技だと知らせよ

うとしたがこの馬鹿は頭に血が上っているのか全く話を聞かない。
ええい、どうしたものか。

こうなったら最後の手段だ。

「ふっ」

どんな女も、いや男であろうと耳に息を吹きかければ動きは一瞬止まる！

「ひゃああ！」

その隙にリーリカの頭をはたく、やっとこっちを見てくれたリーリカは私の顔を見るなり顔を輝かせた。

「マス、お嬢様！ 元気になられたんですね、よかったですー！」

「馬鹿っ、声がでかい。あれは私の演技だ、このまま私の知り合いのところに向かうぞ。今ならあの兵士も医者を呼びに行っているからここにいない、とにかく私をおろせ！」

むっ、私まで声が大きくなってしまった、自重せねば。

リーリカに降ろしてもらい急いでこの場所を離れる。移動中、この町の住民に知り合いの家の場所を聞き直行した。

町の中心部からやや北に位置する研究所、そこに私の知人はいるらしい。実際に足を運んでみるとそこは民家と一つになっており、住宅兼研究所と言ったところだ。今の時間はまだ朝だし民家の方にいるだろうか、研究所ではなく民家の方にあるドアをノックした。

「誰だ？ 今何時だと思つとる」

「久しぶりだな、トーマスⅡルービック」

文句を言いながら扉を開けたのは白髪の男、数十年前にあった時は青臭いガキだったが……時とは悲しいものだ。

「なんだこの小娘は、儂のことを知っているようじゃが……！ その紅い眼は魔女、トリスティンⅡマルールか！？ 何の用だ、儂を殺しに来たんじゃあるまいな」

「そんな心配をする必要はない、今回はお前に頼みがあつてな。断らなければ何も起こらないさ」

トーマスは苦虫をかみつぶしたような顔をしているが無視だ、開かれた扉を通り家の中へと入る。そしてトーマスの案内に従い研究所内へと歩いて行った。

研究所の一室に入ってから、薬品や研究用の機材が乱雑に置かれたテーブルに例の小袋を置く。トーマスがそれを開けるのを見てから口を開いた。

「それが何かわかるか？」

「いや、こんな物見たことがない……おまえさんが作ったのか？」

「ふっ、やはり一般人は知らない技術というわけか。これはオルガとかいう奴の足だ」

「オルガじゃと！？ あれは軍の関係者しか触れぬはずだ、僕の知っている限りじゃその情報やオルガの一部が横流しされたなんて話は……まさか」

「ああ、喧嘩を売ってきたんで遊んでやったんだ」

啞然としながらも熱心に足の一部を調べる様子はまさに研究者と言ったところか、しかしある程度眺めていると首を振った。

「だめじゃな」

「何がだ？」

「こいつは最下級のオルガの物だろう」

「何を馬鹿な事を、私が直接手を下したんだぞ。下級であるわけ」

「いいや、これはいわゆる雑魚って奴の物だ。論より証拠、見ていろ」

そう言うテーブルの上のオルガの足に向け火球を放った、込められた魔力も少ないし詠唱もしていない。まさに最下級の威力だろう。そんなものでどうするつもりだ？

「見てみる、焦げ目がついたのがわかるだろう？」

「馬鹿が、あの威力ではこれくらいの焦げ目がただと予想も出来ないのか」

「その様子だと知らんようじゃな、本来オルガに魔法は効かないのじゃよ」

「ふざけたことを言うな、現に私は二体のオルガを倒している。お前が効かないという魔法でな」

「話は最後まで聞け、オルガの体表を覆っている鉱石。これは魔力を吸収・拡散する能力を持っていてな、あの程度の魔法で焦げ目がついたという事はつまり……こいつは粗悪品じゃ」

なんだと、つまり魔物で言うなら下級のバットやスライムの様な相手だったという事か。

「その顔色ではこいつが上級のオルガだとも思っていた様じゃな、馬鹿なことはやめてさっさと塔に帰るがいい、こいつに魔法使いは勝てんよ」

「……けるな、私が逃げるだと？ そんな事は絶対にあり得ん！ この研究所を数日借りるぞ、この鉱石を隅々まで調べてもっとも効率的な破壊法を見つけてやろう」

「そいつは構わんが条件がある、その様子だとこれと同じものをいくつか持っておるのじゃろう？ そいつを一つ譲ってもらいたい」
む、この私に意見するとは……まあいい、ここには少し長い間留まるかもしれない。バックの中から小袋を一つだけ残して取り出し、そのうちの一個をトーマスに投げる。テーブルの上に残りの小袋を並べる、残りはバックの一つを含めて八個。

そのうちの一つを開けて足を取り出し先程実験に使った物と並べる。

さあ、どうやって料理してやろうか。

第13話：訪れしモノたち（後書き）

誤字脱字を見つけましたら、ご報告していただけると嬉しいです。

第14話：誘惑に負けしモノ（前書き）

今回は長いです

第14話：誘惑に負けしモノ

オルガの素材について調べていてわかったことが二つある。

一つ目は絶対に魔法が効かないというわけではない事、たとえば魔法で水の塊を『作り出した』場合その水は例の鉱石に触れた瞬間消えてしまう。しかしこの間知った魔法で『呼び出した』水は消えなかった。最も形を維持することは出来ずに崩れ落ちてしまったがな。ここから推測できるのはこの鉱石が魔法自体を吸収・拡散しているのではないという事、たぶん魔力を対象から吸い上げて取り込むか放出しているのだろう。

二つ目に吸い込める量に限界があるという事、ただの火球なら何発撃ちこんでも焦げ目がつくだけだが中級魔法である煉獄クリムゾンなら後も残さず焼き切れる……これではわかりにくい、魔力を数値にたとえると魔力を10こめた火球をどれだけ撃ち込んでもだめだが魔力を100こめた呪文なら無効化できないという事。この限界量は鉱石の質によるらしい、高位のオルガは上位呪文すら無効化するという話だ。

つまり奴らに対して有効な攻撃法は相手の魔力拡散能力の限界を越える魔力を込めた魔法をぶち込むか、魔法で何かを呼び出し間接的にダメージを与えるかのどちらかという事だろう。後者はあまり巨大なダメージが期待できないし、何よりそんな回りくどい方法は好かん。残された選択肢は一つだ。

圧倒的な私の魔力ちからでオルガをねじ伏せる。

だがそのためにはあの鉱石をどうにかしなければ……あの刃が出てくるオルガに乗っていた青年が生きていたのも電衣の魔力が多少拡散されていたからだった様だし、くそっあの時に気づいているベ

きだった。

鉱石を無効化するために様々な呪文や薬品を試してみたが未だに有効な手は見つかっていない、強力な酸をかけても融けないなんてふざけている！

すでにこの研究室にこもり始めて一週間、研究材料としてオルガの一部を何個か駄目にしてしまい残るは4個だ。研究は進まないしイライラする。

「失礼します」

ノックもせずに入ってきたのはビビ、トーマスの子供でここに来てから世話をしてくれている娘だ。

「どうです、研究は進みましたか？」

紅茶を出しながらそう聞いて来る彼女に嫌みを言っている自覚はないのだろうがその笑顔に呪いをかけたくなる。

「散歩に行つてきます、それとテーブルに置いてあるものは触らないでください」

このままここにいたら研究所ごと怒りを爆発させてしまいそうだが、そんな事したら満足な研究も出来なくなってしまうからな。

しかし外に出たはいいが相変わらず凄い霧だ、トーマスの話によると海にすんでいる大型の魔物が霧を作り出しているらしい。私には関係ないから無視しているが外出するたびに体が濡れるのは嫌だ、面倒だが駆除した方がいいか。

それとこの町の特産物は甘い果汁が特徴のシユクレという果実があり、それで作ったケーキをビビに食わせてもらったがなかなかの美味だった。帰ったら焼いてもらおう。

ぶらぶらと町を歩いていると果物屋にシユクレが無いのに気づいた、あれは一年を通して採れると聞いていたがどうしたんだ？

「すいません、シユクレが欲しいのですが……」

「おや、この間この町にきた娘さんだね。悪いけどシユクレは品切れだよ、海の化け物がシユクレの農園へ行く道で暴れててな……誰

も取りに行けないんだよ」

何という事だ……つまりこのままではシユクレが手に入らなくて
激甘ケーキも激甘ドリンクもダメという事か。そんなバカなことが
あつてたまるか！ 急いで研究所に帰ってビビに聞いたです。

「ビビ！ シユクレはまだあるのか！？」

「え、トリスさんどうかしたのですか？ 口調がいつもと違います
が」

「そんな事はどうでもいい、あるのかないのかはつきりしろ！」

「無いです！」

いかんいかん、つい猫を被るのを忘れてしまった。ええい、だが
自体は一刻を争う、私のストレスを和らげてくれる甘いものがかか
っているのだ。

このフォローは後ですればいい、町を走って門の所まで行く。門
兵に止められたが頭に触れると同時に魔力を流し込み気絶させる、
町の外に出た瞬間 飛翔した。

目的地は海沿いにある農園、あそこにあるシユクレの実を持ち帰
ればケーキが食えるんだ。そのためなら魔物なんて蹴散らして見せ
よう！

そんなに離れているわけでもないのですぐに農場へ着いた、飛ん
でいるときは体の前面に風を起こしていたので霧で体が濡れること
はない。

霧でぬれたのか露が滴る桃色の果実を発見、これが激甘しあわせの実か。
とりあえず20個もあれば十分だろう、持ってきたバックに入れて
餅に戻ろうとしたときに声が聞こえた。

「ナニモノダ」

聞こえた方向に顔を向けると、そこには霧に包まれ全貌が見えな
い巨体があつた。こいつが例の魔物だろうか、海から上半身だけを

出している様に見えるがそれだけで10メートルはあるように見える。

「気にしないでいい、この実を採りに来たただけだ」

あいつも何か理由があつてここにいるなら私に手を出すこともないだろう、黙って立ち去ればそれでおしまいだ。

奴に背を向けて町に帰ろうとしたとき耳に届いた風を切る音、最近不意打ちされること多くないか？ 疑問に思いながら影壁^{キヤル}を発動、自分の壁を具現化して壁にする。障壁じゃ物理攻撃を防げないからな。

これで防げると思ひ歩き続けるのだが背後で何かが砕ける音、続けて背後から何かに打ちつけられる。くそつあれじゃ防げなかったか！ 油断していたため何メートルか吹き飛ばされてしまった、影壁がなければ少し危なかったかもしれないな。

「き、さま……なぜ私を攻撃した、私はお前の邪魔をした覚えはない。理由を聞かせてもらおうか」

「……」

だんまりか、言えもしない理由で私を攻撃するなんて愚行でしかない。そもそも私を前に姿を見せないとは礼儀を知らん奴め、ここは私が貴様を躡けてやろうじゃないか。

「人と話すときは」

突風を作り出すだけの簡易魔法、詠唱も呪文も何もかも無視して発動させる。

「顔を見せろ！」

方向を変えながら連続して発動させることによって竜巻を作り出す、魔力の消費は少ないが詠唱をしている余裕はない。

竜巻によって周りの霧を上空に追い出したことで奴の素顔がだんだんと明らかになってきた、ここからでは上半身しか見れないが粘膜に覆われ、異臭を放ち、青々と照かるその姿は何というか……

「み、醜い」

「ダメレ！」

あの霧は醜い姿を隠すためだったのか、それならわからない事もない。言われた本人は気に障ったのか腕の代わりに生えている触手を振りまわしてくるが当たらなければ意味がない、空中へと飛び上がり右へ左へと避けさせてもらう。

奴も痺れを切らせたのか体の周りに水球を浮かべた、その数は十二個。大きさも直径2メートルはある、当たれば痛いじゃ済みそうにない。

障壁を斜めに展開する事で水球を受け流し、同時に襲いかかってくる触手を掻い潜りながらも逃げる。くそっ詠唱することが出来ん！大きさを感ずる魔力から奴は上級の魔物だと思ふ、あいつを倒す事が出来る魔法は使えるがこの状況では……どうじてヴィルトはこんなときにいないんだ！いつも敵の注意をひくのにヴィルトを使っていたため一人での戦闘は不慣れだが何とかするしかない。

相手の動きを封じることができればいいんだが、とにかくこの水球に込められた魔力が切れるまで待つか……いや、ここは奴の巨体を有効利用させてもらうとしよう。

バックの中から一つの魔具を取り出し奴に見えないよう体で隠す手を添えて詠唱破棄の魔法を発動、この際は精度より早さ重視だ。

あとは奴にうまく近づいて……投げる！投げた魔具が奴に当たる直前触手に壊されるがそれも予定通り、あの魔具は魔力を必要とする物に魔力を注ぐための魔力が詰まった魔力タンク、それに変質の魔法をかけることによって魔力を糸に変えたのだ。

魔力を限界まで詰め込んだ魔具を壊したから奴の目の前で大量の糸が舞い散る、それを振り払おうと触手を動かしてくれれば……糸が絡みつき触手は使い物にならなくなる、あの糸は私特製の物だから簡単には切れんぞ。

「グウウウウ」

「良いざまだな、そのままいてくれると嬉しいんだが」

未だもがき続ける奴は水球の事も忘れていいのか、水球は私を襲うことなく浮いている。今のうちに……

「万物に根付きし罪の権化……」

目を閉じて全神経を集中させる、上位の呪文でなければ奴を滅ぼすことは不可能、しかし上位の呪文は詠唱は気が出来ない上に極限まで集中しなければいけない隙だらけになるのだ。

イメージする物は無い、ただ自分の語る呪文に耳を傾ける。

しかし集中しようとした瞬間、右腕に激痛が走った。

「っっ!？」

あわてて詠唱を中断し上空へ向けて飛翔する、上昇しながら後ろを見るとかつて水球だったものが見えた。『それ』は回転して姿を変えており、球を潰した様な形をしている、その側面は鋭い刃のように薄くなっており今までよりも素早い動きで私を追ってきていた。痛みのする腕を見るとかなり出血しているのが見えた、くそっ深く切られたか……右腕の二の腕から赤い液体が溢れている。

水の刃となった水球は直撃すれば間違いない死が待っている、先ほど殺さなかったのは私を^{なぶ}蹴るためか、魔物は人を特に女子供を痛めつけることを好む奴が多いからな。

水を交わすために高速で飛び続けたため、その速度のせいで出血も多くなる。このままでは失血で倒れるか……いつそのこと懷に潜り込んで直接中位魔法をぶち込めばダメージがあるかもしれない。

襲いくる水は私と奴を遮るように位置し、三つほど私の背後から迫ってきている。私と奴の間にあるのは九個の刃、それをかいくぐり奴に近づけばいいのだ。

奴に向けて滑空、一つ目は体をひねりぎりぎりの所をすれ違う、二つ目、三つ目も同じように避けたが奴も何か感じたのか残る六個の刃をさらに細かくして私を襲わせる。無数の刃をかわせるはずもなく体を刻まれるが死にはしない、刃の嵐を抜けたとき私は血の衣をまとっていたが顔は勝利を確信し愉悦に歪んでいただろう。

しかし、そんな私を横なぎに払う影。体の骨が砕ける音を聞きながら視線を向けると糸を引きちぎった触手が見えた、気づけば私の背後にあった刃は奴の触手を抑えていた糸を切り刻み、私をあざ笑

うかのようにゆらゆらと揺れていた。

農園の栄養を多く含んだ大地に激突した、顔も服も血や泥で汚れているだろう。この私が何という様だ、^{さま}たった二百年戦いを忘れただけで魔物ごときに痛めつけられるとは……屈辱だ。

思わず唇をかみしめ、口の端から血を伝わせながらも立ち上がった時にバツクからシユクレの実が一つ零れ落ちた。

拾い上げるが手に付着した血液によって桃色の実を緋色に染め上げる、持っただけで血がつくとは出血量が限界に来ているのか、意識が朦朧としてきたのも納得できるというものだ。

腕から落ちる血……そうだ、血があるじゃないか。古代から呪物の媒体として用いられてきた血液、それをどうして忘れていたのだろうか。

バツクから続けて4つ、合わせて五個の実に血液を満遍なく塗り、私を中心として五角形を造るように投げる。

魔力を込められたそれらは光の糸を紡ぎ互いを結びつけ合う、織り上げられるは五芒星の結界。簡易結界だが数秒は奴の攻撃を防げるだろう。

「私は世界を認めない、私は全てを望まない、私は全てを隔絶する

凍隔牢」

五芒星の内側に中位の結界を改めて張る、足もとから私を包むように氷が生み出される。私を包むこの氷は外からの攻撃を防ぐものだ、もつとも私からも攻撃できなくなるのだがな。中位とはいえ言葉に魔力を込めて詠唱したのだから奴が古代呪文でも使わない限り安全だろう、魔物ごときに古代呪文を使えるとは思えんし……絶対とは言えないがこれで奴を倒す事が出来るだろう。

改めて意識を集中させる、自分の魂と向き合い魔力を練り上げる。

「万物に根付きし罪の権化」

詠唱される言葉の意味を反芻し、^{はんすう}その意味を私の意識と同調させる。意識は意味を持ち、言葉は力を持つ。

「具現せよ！ 顕現せよ！ 現は偽りとなり夢と消えされ」

私を食い尽くすかのように闇が氷の内側を埋め尽くす。闇は私であり、闇は全てである事を概念として理解する。そして人が必ず持つ思いを、ここに存在する闇の名を口にする。

「罪の意識（ペツシェ・コワン）」

名に示された闇は私の前で一つの形をとる、消えてしまいそうなほど儚く揺れ動く黒はゆつくりと形を定め、数秒後には1メートルほどの槍となった。黒く長い柄の先に付いた30cm程の同じく黒の刃、何の装飾もされていないそれは圧倒的な存在感を放ちつつ存在していた。

重さを感じさせない槍は傷ついた腕でもふれそうだが、動かすと痛いから傷ついていない左手で持つけど。魔力を傷口に集中させ血を止める、傷は治らないが血を止めるだけでも十分戦えるだろう。

痛む体を無理やり動かし槍を振る、槍は氷の牢を軽く傷つけるだけではじかれてしまった。しかし槍があたった所から黒い染みが生まれ、ゆつくりと氷を染め上げる。

全てを染め上げた時に結界は砕け、冷たい風が体を通り抜ける。

周りには細かくなっていた水の刃がいくつか凍りついていたが、ほとんどは未だ空中で回転を続けている。

「待たせたな」

いままで触手や水で攻撃を試みたのだろう、触手の一部が凍っている。手を出しても無駄だと気づいた後はおとなしく待っていたのだろうが待たされていらしているようだ。

魔物との会話など不要、左手に持った槍を奴に向けるとそのまま空中に浮かび奴を挑発する。まあ下位呪文を数発ぶっつけたただだが触手と水が飛んでくる。

飛んできた水の刃に槍が触れれば闇が侵食し破壊される、刃の一团が私と交差した数秒後には大きな刃のほとんどが崩れ落ちた。奴は警戒したのか分裂していた刃をまとめ大きな刃を三つ作り出した、その間も私は奴に向かって突進し片方の触手を斬りつける。

「グアアアアア」

触手が先のほうから黒く染まっていくと同時に悲鳴が上がる、闇に飲まれるときは激痛と快感が体を貫くというのが声を聞いた限りでは痛みのほうが強そうだ。

しかし奴は冷静だった、黒く染まっていくな触手を水で切断したのだ。人で言うなら自分の腕を自ら切り落とした、再生が可能なものかもしれないが戦いの中で迷わず腕を落とすとは……この槍の危険性に気づいたか？

ならば奴が切り落とせない処、頭を切りつけるだけだ。すでに奴の懐に入った、腹の部分から体を切りつけつつ上昇し頭を目指す。短くなった触手が途中で襲ってくるがもう脅威ではない。

顔の前、まさに目の前で槍を突きつけ恐怖に彩られたに近づいていく。槍の刃先が頭に沈んでいくがこのまま刺してもこいつは死なないだろう、槍を振り出してくるはずだ。だから魔力で槍を打ち出し完全に頭に埋め込む、体の中から破壊すれば死ぬだろう？

暴れる奴のそばにいては危ないから触手の届かないところへ避難、農園の端に降り立ち奴が消滅するのを待つ。

シユクレを齧りながら待っていたが気づいたら食べるのに夢中で奴が死んだことに気づかなかった、槍が対象を滅ぼし私のところに戻ってきて気づいたくらいだ。

闇が飲み込んだ生命を取り込むことで傷を完治させる、折れたり砕けたりしていた骨も治ったし痛むところは何も無い。

新たに持ったシユクレの実を持って町へと戻る途中で破壊された農園を見たが三分の一は破壊されていて果樹は無残な姿になっていた、破壊したのはあの魔物だし私は悪くないよな？

第14話：誘惑に負けしモノ（後書き）

これで書き溜めていたモノは最後です、気合いで執筆しますが多少投稿が遅くなるかも知れません。そしてオルガのアイデアを募集します、個体名から姿形まで幅広く募集しますので皆様の思い付いたものがありましたら感想欄に書き込んでいただきたいと思います。よろしく願います。

第15話：力を求めしモノ（前書き）

更新が遅くなつてしまい申し訳ございません、現在資格を取得するための勉強で執筆が遅くなっております。ご迷惑をおかけしますが読んでいただければ嬉しいです。

第15話：力を求めしモノ

海の魔物と戦闘後、研究所に戻った私を迎えたのは女性陣の悲鳴だった。先程の戦いで出来た傷は 罪の意識 で消したのだが服についていた血はそのままだったので驚いたらしい、確かに淡い赤をしていたはずの服がどす黒い血に染まっている。ビビは血に慣れていないだろうから驚くのは理解できるがリーリ力よ、お前は血なんて見飽きているだろうに。

心配する二人の前で服を脱いで傷がないことを証明、しかし何故かリーリ力が鼻血を出しながら部屋へと消えて行った。傷がなくて安心したら私を放置か、酷い奴だ。

服を持ち去られたから仕方なくバックに手をつ込み服を出す、塔が半壊した時に適当に持ってきたのだがリーリ力手製のやたらと布の多いドレスばかり入っていたのが悔やまれる。まあ裸よりはましか、とりあえず袖を通して研究室へ戻る。

研究室に置かれた椅子に座り今回の戦闘を振り返る、上級とはいえ魔物相手にあそこまでやられてしまうとは……私の力とはこんなものだったのだろうか。いや、塔に籠るまではあれくらいの敵を何度も殺してきたんだ、純粹に私が弱体化したと考えるのが妥当か。

だとしたらオルガの鉱石を調べても私の力が足りなければ勝てるはずがない、そう思い立ち私は研究室に散らばる研究資料を部屋の隅に追いやり魔導書を広げる、

「魔力だけなら魔人にも負けない私が魔物にてこずる理由……」

それは魔法の発動時間にある、リーリ力達のような魔人はそれぞれ固有の魔法を持っており、それを使うのに詠唱がいらぬ。なので強力な呪文を次から次へと発動できるのだ。

私には上位魔法の詠唱を破棄することができない、ならばそれを補う力を手に入れねばこれからの戦いは厳しいものになるだろう。魔導書に記された魔術儀式を調べる、体に呪文を刻みこみ詠唱を省

略する秘法、魔人と契約を交わす方法。前者は体に傷が残るから嫌だ、後者は命を取られるので論外……リーリカみたいな何も求めずついて来るやつは特殊だがそのような能力は持たない。奴の魔法は怪我を治すか破壊するかの偏った力だからな、私のサポートにはむかない。

私が悩み、呻きつつも調べ物をしているとリーリカが手に魔導書を数冊持つて部屋に入ってきた、先程念話で資料になりそうな物を持つてきてもらうように頼んだのだが前が見えなくなるほど持つてくるとは……さすがリーリカ。床に広げた資料を二人で眺め続けたが効果的な方法はなかった、まあそんな方法があればその辺の人間がやっているよな。

半ばあきらめて紅茶を飲んでいるとリーリカがポツリと言葉を漏らした。

「魔界の先生なら……」

「ん？ 魔界の奴がどうかしたのか？」

「あ、いいえお気になさらないでください。魔界の変態さんを思い出したりなんてしてませんから！」

「魔界か……調べた中にもそれらしいことは書いてあったが生きているやつは入れないのだろう？」

「あの、私たちも一応生きているのですが」

むむ、そう言えば魔物も魔人も一応生きているんだっただとしたら生きている人間が入れないというのはただの力量不足という事だろうか、それに魔界には私の知らない魔法も多いだろうし力を得るにはいいかもしれん。

「よし、魔界に行くぞ」

思い立ったら吉日という言葉もあるくらいだ、今すぐ行こう。持ち物は全てバックの中に詰め込んであるので特に準備はいらない、部屋の隅にオルガの足だけが散乱していたので拾ってバックに突っ込む。

「お待ちくださいっ魔界に行くとってもどうやって行くというん

ですか！ それに魔界には……」

慌てて私を引き止めるための説得しようとするリーリカを置いて部屋を出るとそのままトーマスの部屋に乱入する。

「どうした何かわかったのか！？」

いきなり部屋に入った私を見たトーマスは落ちついていたがオルガの一部が入った袋を見せると椅子を倒して立ち上がる。こわばった面持ちで興奮する爺が唾を吐きながら詰め寄ってくる、汚らしい。「ああ、大事なことがわかった。それを説明するからこの間渡したオルガの一部を出してくれ」

鼻息の荒い馬鹿トーマスはいそいと棚の中から袋を取り出して机の上に置く、私が手に取る様子を見つめられるのは気持ちが悪くてたまらんな。

奴の目の前まで足の一部を持ち上げ、奴の視線が手を追ってきているのを確認してからオルガの足を真上に投げる。驚くトーマスの顔に手を押し当てて魔法を発動。

「消記」
リコス

トーマスの額に手を当て魔法をかける、ここを去るのだからしっかりとオルガの一部を回収せねばな。こいつの記憶からオルガの一部に関する記憶を消し去り、崩れ落ちる体の方は無視だ。

足を回収後、キッチンにいるビビにここを去ることを告げる。シユクレのジャムと飴をもらえたのは日ごろの行いだな、もらった飴を頬張りながら家を出る時にそう思った。ビビには世話になったから何もしないでいいでしょう、別に甘いケーキをくれたからじゃないぞ？

リーリカを従え町の外に行き魔界に渡る準備を進める、必要なものも多いがリーリカがいれば代用できるものも見つかるだろう。

さあ魔界に続く扉を開き、復讐への序曲を奏でようじゃないか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0593e/>

悲しみの血 呪われた涙

2010年10月21日21時13分発行